羊とドラコ

「嘘吐きウガツの冒険譚」

脚本　竜崎だいち

〈登場人物〉

・ゼンカ／ランプ女
・カラス／作業着の男
・コウモリ／飯女
・ノラ／鐘つき
・コイシ／バケツ女
・クロネズミ／オマワリ
・シロモグラ／おまわり
・クモ／地図男
・タガシ／女
・親方／謎の声／おっちゃん

・ウガツ

プロローグ

静かな舞台上に、作業着を着た少年が一人。
けだるそうに歩いてくる。

……。

鐘つき

鐘つき、天井から垂れていた紐をぐっと引き下ろす。
ガリーン、ガリーン。
錆びた大きな鐘がけたたましい音を鳴らす。
音はあたりの洞窟に反響し、まるで、
大量の鐘が鳴っているようにも聞こえる。
仕事を始める合図だ。
両サイドから、同じく作業着を着た者たちが入ってくる。
そこここで、朝の挨拶を交わし、仕事が始まる。
スコップ、つるはし、使い、一斉に作業開始。
皆それぞれに作業をしていたかと思いきや、
次の瞬間、びたりと動きが合う。
そしてまた、それぞれに動き出す。
土を起こす者。掘る者。運ぶ者。杭を打つ者、地図を引く者。
現場の責任者のような者もいる。
あれこれと指示を出している。
と、そこへ手持ちランプを片手に持つ女が現れる。
同じように働きはじめるのか、と思いきや。
責任者がひとつ合図、鉱員たちは去っていく。残される女。

女はそれには動じない。なぜなら、
彼女がいたのは鉱山ではなく、自分の家の玄関だからだ。
出かけようとすると、家の奥から誰かに呼び止められる。
立ち止まる女。
奥の誰かと喋っているようだが、声や姿は見えない。

（母　出かけるの？）
ランプ女　うん。
（母　大丈夫なの？）
ランプ女　うん、もう大丈夫。
（母　ならいいけど。仕事は？）
ランプ女　ああ、店は明日から出るよ。ごめんね、迷惑かけちゃって。
（母　いいのよ。）
ランプ女　うん…。
（母　あ、そういやお母さん、）
ランプ女　なに？
（母　これからお見舞い行くけど。一緒に行く？）
ランプ女　ああ、おじさんのお見舞いなら昨日行ってきた。
（母　そうなの？）
ランプ女　うん、母さんの仕事中に。
（母　そうなの。）
ランプ女　退屈だってぼやいてたから、話し相手になってあげたら。喜ぶと思うよ。
（母　そうね。）
ランプ女　（出かけようとする）
（母　あ、ねえゼンカ。）
ランプ女　……なに。

（母　危ないところには行っちゃだめよ。）
ランプ女　分かってる。
（母　何時ごろ戻るの？）
ランプ女　ああ……ちょっと遅くなると思うけど、……今日中には戻ってくるから。
（母　そう。）
ランプ女　うん。
（母　じゃあ、いってらっしゃい。）
ランプ女　うん、……いってきます。

なんとなく逃げるように、家を出るランプ女。
賑やかな街の風景に溶けていくランプ女。
ややあって場面変わる。
鉱山内部、採掘場。
先ほどの賑やかな風景とは変わって、
舞台上は作業着の男だけになる。
作業着の男が、金槌とノミを使って石を打つ。
カーンと澄んだ高い音が、採掘場の岩肌に響く。
男、削った石などをしげしげと眺め調べながら。

作業着の男　……だめだな、なんにも出てきやしねえ。この辺はもうだめかね。別の方に進めた方がよさそう、か。

ふと、作業着の男、うしろの気配に気が付く。

作業着の男　そんなとこに突っ立ってないで、こっちに来たらどうだ。

気配は動かない。

作業着の男　いいけど、……そのへんの壁触んなよ。補強入ってねえから、崩れてきても責任持たんぞ。

気配、短い悲鳴をあげて出てくる。ランプ女だ。

ランプ女　あっ、の。
作業着の男　……珍しいこともあるもんだ。
ランプ女　へ。
作業着の男　ちょっと待ってな、もうすぐしたら一旦街に戻るから。
ランプ女　あ。
作業着の男　まあ、なんにも言うなよ。気持ちは、分からいでもないぜ。人間誰だって、だめだめだって言われりゃ一回ぐらいやってみたくなるもんよ。
ランプ女　あの。
作業着の男　俺に時間がありゃあなあ、ちょっとぐらい道案内してやってもいいんだけど……ああ、いや、いくら俺でもそりゃあねえか。はは。
ランプ女　あの、地図なら、持ってます。
作業着の男　……計画犯か。クモのやつ、たらしこまれやがって。
ランプ女　カラスさん。
カラス　なんだ、俺の事知ってんのか。
ランプ女　わたし、ウガツを探してます。
カラス　……。
ランプ女　あの、わたし。
カラス　なら勝手に探せ。どこにいるかは知らんがな。

ランプ女　あのっ。
カラス　なんだよ。
ランプ女　あなたに聞けば、何か、手がかりだけでもわかるかと思って。
カラス　なんで。
ランプ女　だって、相棒……だったんじゃないんですか、ウガツとカラスさん。

カラス　誰からそんなこと聞いた。
ランプ女　違うんですか。
カラス　……違うね。あんな嘘吐き、俺の相棒なわけないだろ。
ランプ女　……そっか。
カラス　あ？
ランプ女　あなたが言うなら本当なんだなって。ウガツはやっぱり嘘吐きだったんだ。

カラス　そんなの誰でも知ってることだろ、何を今更。
ランプ女　でも。
カラス　お前は。
ランプ女　え。
カラス　お前はなんでウガツ探してんの。まあ、あいつはバカみたいに顔が広いからな、お前と知り合いだからって別に不思議にゃ思わねえよ。けどよ、お前は。
ランプ女　わたし、ウガツに、お金を貸してます。
カラス　……、金？
ランプ女　はい。お金。
カラス　へええ……、金ねえ。
ランプ女　はい。だから探してます、ウガツを。全財産だったから、返してもらわないと、わたし、この先どうしたらいいか。
カラス　ああ、わかったわかった。あいつのやることは予測なんてつかんから、お前から金借りたって話も、ない話じゃあないんだろうさ、けどさ。
ランプ女　……けど。
カラス　お前、ゼンカだろ。
ゼンカ　……。
カラス　ゼンカだろ。その名のせいで一生穴には入れない、居残りゼンカ。街の食堂手伝って、その日暮らしがやっとの、のけものゼンカ、逆立ちしたって一攫千金狙えやしない、ひなた暮らしのゼンカ、そんなお前から金借りるなんて、ウガツも落ちぶれたもんだ。
ゼンカ　嘘じゃありません。お願いします、ウガツがどこにいるのか、知ってるんなら教えて欲しいんです。
カラス　悪いけど俺は知らない。
ゼンカ　カラスさん！
カラス　けど、お前がそんなにウガツ探したいってんなら、いくらでも方法はあるだろ。
ゼンカ　方法？
カラス　聞きゃあいいんだ。ウガツを知ってるやつらから。あいつを探してるってんなら知ってるはずだろ、あいつはバカみたいに顔が広いし、あいつに文句が言いたい奴らだってごまんといる。そん中の誰か一人くらいは、ウガツの居場所知ってるかもしれないな。
ゼンカ　カラスさんは。
カラス　俺は知らない。
ゼンカ　嘘、じゃなく、ですか。
カラス　嘘じゃないさ。ああもう、わかったわかった、じゃあ一人は紹介してやるから、ウガツを知ってたやつ、な、だから一旦

ゼンカ　街に戻って。
カラス　いやです。
ゼンカ　は？
　　わたし、街には戻りません。

　　ゼンカ、ゆっくり、穴の奥へ、後ずさっていく。

カラス　おい、なんで。
ゼンカ　案内して下さいカラスさん、鉱山の中。わたし地図なら持ってるから。
カラス　いや、いくら俺でもお前と一緒はちょっと。とりあえず街に戻ってな。
ゼンカ　いやです。
カラス　おい、あんまそっち行くな。
ゼンカ　お願いします、カラスさん。わたし。
カラス　分かったから、待て。
ゼンカ　ウガツに会わないと。わたし。
カラス　それ以上は、おい止まれ！
ゼンカ　え？　あっ……！

　　ふっ、と、ゼンカの姿が地に消える。
　　追いかけて、ゼンカの悲鳴が穴の奥から聞こえる。
　　カラス、とっさに駆け寄ろうとするが間に合わない。
　　ゼンカの落っこちた穴を見て、頭を抱えて。

カラス　……嘘だろ。

　　穴に落ちたゼンカがお尻をさすっている。
　　ふと見ると、
　　ゼンカの眼前に、何人もの人間がずらっと並んでいる。
　　これは幻か。ゼンカは彼らを呆然と見つめている。
　　と、鉱員たちの中から、一人の男がゆっくりと出てくる。
　　男はゼンカの横を通り過ぎ、行ってしまう。
　　ゼンカ、追いかけようとするが、できない。
　　彼は、ウガツか。
　　その姿は鉱員たちの中に溶けていく。
　　カラス一人に戻る。
　　ゼンカの落ちた穴に向かって。

カラス　おーい、向こうから回ってそっち行ってやるから、いいか、そこでじっとしてんだぞ！　いいな！　……聞こえてんのかな。畜生、なんで俺がこんな目に。くそっ。

　　カラス、去る。

1

暗い鉱山の中。
ゼンカ、自分が落ちた穴を見上げて。

ゼンカ　あのお、す、すいませーん。カラスさーん。……聞こえてんのかな。（あたり見回して）暗っ……。ここ、どこなんだろ。

ゼンカ、持っていたランプに火をともす。
ふっとあたりが明るくなる。
と、一人のバケツを抱えた女が入ってくる。
何かを拾っている最中だったようだ。

バケツ女　わっ。
ゼンカ　あ、っ、どうも。
バケツ女　だれ、あんた。
ゼンカ　あ。
バケツ女　なにしてんの。
ゼンカ　あの。
バケツ女　見ない顔だけど、ここ、あたいらの縄張りだって分かって入ってんの。
ゼンカ　ナワバリ？　いや、そんなつもりじゃ……。

バケツ女、ゼンカの手元のランプを見つける。
みるみる表情が変わるバケツ女。ずずいとゼンカに近寄る。

バケツ女　……！
ゼンカ　な、なに？
バケツ女　なんであんたがこれ持ってんのよ。

と、バケツ女の後方から声が。

鉱員A　（声）コイシー、何やってんだー。
鉱員B　（声）そろそろ上がるぞー、戻ってこーい。
コイシ　先行っといてー！　すぐ追いつくからー。
ゼンカ　えっと。
コイシ　あんた、何者？
ゼンカ　わ、わたし？　あ、あの穴から、落っこちちゃって。
コイシ　いや、質問変えるわ。あんた、ウガツのなんなの？
ゼンカ　え、ええ？　な、なんで。
コイシ　ウガツのなんなの？！
ゼンカ　いや、なにと言われても、わたしは。
コイシ　それ。
ゼンカ　どれ？
コイシ　それ！　ランプ！　なんであんたがそれ持ってんのよ。
ゼンカ　え、あ、こ、これは別に。（ランプを後ろ手に隠す）
コイシ　あー隠した！
ゼンカ　いや、隠すとかないけど。（戻す）
コイシ　ほらこれほらこれ！
ゼンカ　え、え、怖い。（ランプを後ろ手に隠す）
コイシ　あーまた隠した！
ゼンカ　いや、あの、あああ。（戻す）

コイシ　やましいことがあるから隠すんでしょ。
ゼンカ　やましいこと？
コイシ　やましいことがなかったら隠したりなんかしないんだ！
ゼンカ　やましいことなんか、ないけど。
コイシ　あんたウガツのなんなの？　なんであんたがそれ持ってんの！　あんた、ウガツの居場所知ってんでしょ！　ねえそうなんでしょ！　隠してないで教えなさいよねえ！
ゼンカ　待って、待って、あの、あなた誰なの？
コイシ　あたいは、「ウガツの奥さん」よ！
ゼンカ　えー？！　ウガツって結婚してたの？
コイシ　いーい？　それ、そのランプはね、あたいがウガツにあげたもんなの！
ゼンカ　え？
コイシ　ウガツと一緒にいるときに、彼のランプが壊れたから代わりにあたいのランプあげたのよ！　この下の方、ほぉら、あたいの名前彫ってある！　これが動かぬ証拠よ！
ゼンカ　えーっと。これは、あの、ウガツにもらったんです、借金のカタに。
コイシ　借金？？
ゼンカ　わたしも探してるんです、ウガツを。わたし、ウガツにお金を貸してるんです。全財産だったから、見つけ出して返してもらわないと。
コイシ　あんた下手な嘘ついてんじゃないよ！
ゼンカ　嘘じゃないです。
コイシ　ウガツがあんたみたいな小娘からはした金なんか借りるわけないでしょ！
ゼンカ　なんではした金って決めつけるんですか！
コイシ　そんなヘロヘロのタケも合ってないボロ作業着来てるやつが、大金なんか持ってるわけないでしょ！
ゼンカ　でも貸したんです。だから知ってることがあるなら。
コイシ　このコイシ頭からぶっかけられたくなかったら、ふざけたこと言う前に早くウガツの居場所吐きなっ！

コイシがバケツの中身をひっかけようとする。
そこへ鐘つきが駆け込んでくる。

鐘つき　おいやめろよコイシ！
コイシ　あっ、の、ノラくん！
ノラ　あんた、離れて！
ゼンカ　あっ。（コイシから離れる）
コイシ　まて逃げんな！
ゼンカ　……！（立ち止まってしまう）
ノラ　なあ……コイシ、まだウガツのこと、追いかけてんのか。
コイシ　え、そ、そうよ、当たり前でしょ。
ノラ　あいつはもういないよ。みんなであれだけ探して見つかんないんだ、きっともう。
コイシ　バカなこと言わないでよ！　ウガツは帰ってくるわよ！
ノラ　ちゃんと、あたいのもとに帰ってくるわよ！
コイシ　なあ、コイシ。やっぱり、おれじゃだめかな。
ノラ　あ、あ、だ、ダメに決まってるでしょ。
コイシ　なあ、おれ、頑張ってんだよ。おれ、ウガツなんかよりずっと稼ぐようになったし、今だってほら、コイシのそばにいられる。なあ、コイシ。
コイシ　ダメったらダメだって。

ノラ　コイシ。
コイシ　（ゼンカに）あんた、走って！
ゼンカ　ええ？

コイシ、ゼンカの手を取ってその場を逃げ出す。

ノラ　あ、ちょっと！　コイシ！

ノラ、コイシを追いかける。
コイシとゼンカ走りながら。

ゼンカ　あの、なんで逃げるの？
コイシ　聞かないで！
ゼンカ　でも。
コイシ　もーーーっ、なんなのよあんた！
ゼンカ　ええ？
コイシ　あんたがウガツの居場所知ってたら万事うまくいったのに！
ゼンカ　どういうこと？
コイシ　だから！　あたいは！　ノラくんが好きなの！
ゼンカ　ええ！　じゃあ。
コイシ　止まらないで！　これには深いふかあい事情があるの！
話すと長いから話さないけど！
ゼンカ　聞かせて下さい。
コイシ　はあ？
ゼンカ　わたしにそれ、聞かせて下さい。
コイシ　あんた、この状況で話せと？
ゼンカ　はい。
コイシ　バカじゃないの！
ゼンカ　バカじゃないです。聞かせてください。
コイシ　あのねえ！

と、ノラが追いかけてくる。

ノラ　待ってよ、ねえ、コイシ！
ゼンカ　わたし、ウガツを探してます。けどわたし、ウガツのこと、ぜんぜん知らないんです。あいつがどんな奴だったのか。どんなことをしてきて、周りにどんなふうに思われてたのか。これから、どうしようとしてるのか。
コイシ　そんなの知ってどうすんの。
ゼンカ　見つかる気がして。
コイシ　は。
ゼンカ　見つけられる気がして。ウガツを。だから、知りたいんです。
コイシ　コイシさん、お願いします。
ゼンカ　あんた、ウガツの何なの？
コイシ　止まらないで！　これには深いふかあい事情があるの！
話すと長いから話さないけど！
ゼンカ　それあたいのセリフ！
コイシ　コイシさん！
ゼンカ　分かったわよ！　じゃあ話してあげる。だけどいい？　あたいの話が終わったら、ちゃんとあんたの話も聞かせてもらうからね！

場面ひっくり返る。つまり、冒険譚の中へ。

コイシ、独白。

コイシ　あたいはコイシ、小石拾いのコイシ。みんなが掘った瓦礫の中から、売れる鉱石見つけ出しては拾う毎日。スコップふるう力はないけど、石を見るなら誰にも負けない。だってここは鉱山の街。山にかかわる仕事をしていりゃ、街では一目置かれるわけよ。

ノラ、独白。

ノラ　おれはノラ、鐘つきのノラ、毎朝仕事のはじまり告げて、だれより早く山に入る。まだまだガキだし力はないけど、今しか出来ない仕事もあるわけ。小柄な体を味方につけて、でっかいアタリを見つけ出す。いつかは現場を任せてもらえる、一人前に必ずなるのだ。

コイシ　あ、あのっ、おはようノラくん。

ノラ　ういーっす、コイシ。

コイシ　あっ……。

ノラ、軽く挨拶して通り過ぎていく。が。

ノラ　あ、そうだコイシ。

コイシ　な、なに？！

ノラ　なにじゃないだろ、ほら、最近いい場所見つけてないの？

コイシ　あっ、えと、あ、あるよ！　こないだ教えた場所の左手の道、まっすぐ進んだ先にノラくんしか入れない隙間がある。あの辺はまだ誰にも荒らされてないから。

ノラ　なるほどな、よし、いつもありがとコイシ。じゃあなっ。

コイシ　あっ……。

ノラ、行ってしまう。

ゼンカ　ねえ、どう思う！？

コイシ　え、え？　あ、わたしも、しゃべれる感じ？

ゼンカ　そうよ！　今、あたいはあんたにしゃべってんのよこの話！

コイシ　あたい、ノラくんが好き。あんなにちっちゃくてかわいいのに、人一倍仕事を頑張るその姿、かっこいいじゃない！　でもコイシは小石拾うことしか能がない。こんなあたいとノラくんが釣り合うとは思わない。

ゼンカ　そうかな、諦めずにがんばったらもしかしたら。

コイシ　だからね！

ゼンカ　おおぅ、はい。

コイシ　あたい、ウガツに相談したの！

ゼンカ　へ？

コイシ　分かる。「なんで？」って思うの、わかるよ！　だってウガツは奇人変人。確かに腕はいいようだけど、わけのわからんこと言うし、すごい地層を掘り当てるけど、変な嘘で惑わすし、あいつの成果は大きいけれど、代わりに事故もじゃんじゃん起こすし。

ゼンカ　じゃあ、なんでウガツなんかに。

コイシ　あたい、ウガツに相談したのね。そしたら、ウガツはなんて言って返してきたと思う？

ゼンカ　……。

コイシ　なんて言ったと思う？

ゼンカ　そんなの、わかるわけないよ。
コイシ　頭があるでしょ考えて！　なんて言ったと思う？
ゼンカ　えー？

と、一陣の風が鉱山内を駆ける。ひゅううっと岩肌が鳴る。
そして。

声　なんて言ったと思う？　なあ、ゼンカ。
ゼンカ　この声、まさか…！

ゼンカ、声のした方向に振り返る。そこには。

ウガツ　答えはこうだ、ぼくと結婚しろ、コイシ！
コイシ　はあ？　なに言ってんのウガツ？　話聞いてた？　あたいはノラくんのことが！
ウガツ　いいからぼくを信じろって、悪いようにはしないからさ。
コイシ　だいたいなんであたいがあんたと結婚しなきゃいけないわけ？　まさかあんた、あたいのことが好きなの？　わあお。
ウガツ　んーまあ嫌いじゃないけど。
コイシ　なにそれ、なにそれ、失礼。
ウガツ　心配すんな、これはただの茶番だから。
コイシ　茶番？
ウガツ　いいから、言うとおりにするんなら、ノラをあんたのとりこにしてやるよ。
コイシ　とっ…！　う、嘘じゃないでしょうね。
ウガツ　嘘じゃないさ、今のところは。
コイシ　なにそれ。
ウガツ　ことばの通り。嘘かどうかを決めるのはぼくじゃないし。
コイシ　は。
ウガツ　とにかく、言うとおりにするんなら、約束してやるよ。
コイシ　分かったわ。ていうか！　さっきの件も、忘れないでよね。
ウガツ　あー、うん、わかってる。うまくやるって。
コイシ　その言葉に二言はないね。
ウガツ　二言はないよ。
コイシ　確かに聞いたからね！　それが嘘だったら、あたいもみんなとおんなじように、あんたが嘘吐きだってウワサ、散々まき散らしてやるんだからね！
ノラ　お好きにどうぞ。あ、そうだ。
コイシ　なに。
ノラ　もしノラのやつが、あんたにプロポーズしてきても、いいかい、ぼくがいいっていうまで絶対受けるなよ。
コイシ　プロ……、なんで！
ノラ　まあ強いて言うなら、今はぼくが旦那さんだから？　わかった？
コイシ　分かったわよ、期待しないで待ってるわ。

ウガツいなくなり、代わりにノラ。

ノラ　コイシ！
コイシ　ノラくん！
ノラ　あの、あのさ、おまえ、ウガツと結婚したってほんと？
コイシ　あっ、うん。まあ、（小声で）…成り行きで…。
ノラ　あのさ！
コイシ　なに？
ノラ　結婚してください！

コイシ　えええええっ！　いきなり来た！
ノラ　あっあの、今更になってこんなこというのも、なんなんだけど。ていうか、もう手遅れだろって思うかもしれないけど、でも、じいちゃんが言ってた、人間死ぬまでは何事もあきらめるな。どんなことも生きていりゃひっくりかえせる、だから、おれと結婚してください！
コイシ　あの、あの、あの、なんで。
ノラ　え。
コイシ　なんで、あの、こんな、きゅうに？
ノラ　なんでって、それは、まぁ……すき、だから？
コイシ　なんでそこ疑問形？
ノラ　とにかく、結婚してください！　お願いします！

突然ノラの時間だけが止まる。

コイシ　あたいは断った。
ゼンカ　なんで？
コイシ　ウガツとの約束だったし！　それに、あの時舞い上がって受けていたら、今頃後悔することになってただろうし。
ゼンカ　どういうこと？

今度はコイシの時間だけが止まる。

ノラ　そこから先はおれが話すよ。
ゼンカ　ノラさん、あなたもしゃべれる系？
ノラ　もちろん、だってこれはおれの話でもあるから。

コイシの時間が戻ってくる。
ただしこれはノラの回想のコイシ。

コイシ　無理に決まってんでしょ、だってあたい、ウガツの奥さんになったんだから！
ノラ　おれはどうしてもコイシが欲しかった。
コイシ　もう行かなくちゃ、ウガツが山から戻ってくる頃だし。
ノラ　むちゃくちゃ言ってるのは分かってた。けと、その時はそれしか言葉がみつからなかった。
コイシ　まあでも、ノラくんのことも嫌いじゃないし、二番目くらいにはしてやってもいいけど。
ノラ　相手が誰だろうがそんなことどうでもよかった。
コイシ　ノラくん、そこまであたいのこと。
ノラ　勘違いすんな、おまえのことじゃないから！
コイシ　へ。
ノラ　おれはウガツが娶った嫁が欲しかったんだ。ウガツが選んだ女が欲しい。ただそれだけのことだったんだ！

鉱員たち出てくる。

ノラ　なあなあなあ、この山で一番すげえ穴掘り屋って誰？
鉱員1　さあな。
鉱員2　知らんな。
ノラ　なあなあなあ、教えてくれよ。
鉱員3　みんなすげえよ、この山に入ってるやつらはみんな。
ノラ　そうじゃなくて。一番を聞いてんだって。
鉱員4　優劣なんてつけるもんじゃねえ。

ノラ　でも。
鉱員5　ナンバーワンよりオンリーワンっていうだろ。
ノラ　でも。
鉱員6　みんなそれぞれ役目を持ってる。一番なんて決めちゃいけねえよ。
ノラ　それでも、おれは一番になりたいの！

鉱員たち、時間止まって。

ノラ　おれの家は代々凄腕の穴掘り屋が育ったんだと。ひいじいちゃんは町長に、ひいひいじいちゃんは人間国宝、ひいひいひいひいじいちゃんと、ひいひいひいひいひいじいちゃんは鉱山の中に銅像が立ってる。だけど、山を仕切ってたじいちゃんが2年前行方不明になったその日から、おれの家の光は消えちまった。父さんは全然ぱっとしない、じいちゃんの跡を継ごうだなんて思っちゃいない。あの家に光を灯せるのはおれしかいない。おれがこの鉱山イチの穴掘り屋になって、おれの家に、光を取り戻してみせるんだ。

鉱員1　おいノラ。
鉱員2　なんで一番にこだわんだよ。
鉱員3　お前にゃ無理だよ。
鉱員4　まだ小さいし。
鉱員5　力も弱いし。
鉱員6　それにお前は。
ノラ　うるさいうるさいだまれ！　どいつもこいつもぱっとしないくせに！　いいから早く、この山で一番すげえ穴掘り屋を教えろよ！
鉱員1　あー。今の一番っつったら、ウガツじゃねえの？　しらねえけど。
ノラ　ウガツ？
鉱員たち　そうだな。今の一番っつったら、ウガツかね。しらねえけど。
ノラ　今の一番はウガツ。
鉱員たち　良くも悪くも、今の一番はウガツかもな、しらねえけど。

鉱員たち、行ってしまう。

ノラ　一番はウガツ。それからおれは、その、ウガツってやつを目指すようになった。ウガツがでかいアタリを見つけたってんなら、おれも死に物狂いでアタリを探しまくった。ウガツがまだ見ぬ化石を見つけたってんなら、おれも化石を探して掘り続けた。ウガツが誰も見たことない真っ赤な石を見つけたってんなら、おれもそれとおんなじ石を見つけてみんなに見せびらかした。
コイシ　すごいねノラくん、お手柄じゃない。
ノラ　でもおれを褒めてくれるのは、小石拾いのコイシだけ。
コイシ　あのさ。
ノラ　だまれよ！
コイシ　え。
ノラ　あ……違った、おれと結婚してくれよ、なあコイシ。
コイシ　だめよ、あたいはウガツのお嫁さんだから。
ノラ　なんでだよ……。おれはちびだし力も弱い。頭も悪いし知恵もない。けど、どんな馬鹿でも猿真似ならできる。一挙手一投足、ウガツとおんなじことをしていりゃ、きっといつかは

一番になれる。
あたいはノラくんがウガツを追っかけてんのを知ってた。だからわざとウガツに相談した。そして。
あの日、鉱山の中で突然ウガツに声を掛けられた。
あたいはウガツにノラくんをおびき出してもらうよう頼んだ。
でかいアタリを見つけたけど、どうしても入れない隙間があるらしい。
地盤のやわらかいあの場所に。
おれはいちもにもなく引き受けた。
人が入ればあそこはきっと崩れる。
ウガツの先手をつけるかもしれない。
ノラくんはあたいが助けるから。
そして。おれが横取りするんだ。ウガツの見つけたあたりを。
その代わりに落ちるのはウガツ。ちょっと背中を押すだけでいい。そして。
返したつるはしで、ウガツをやっちまうってのもいいかもな。
ウガツがいなくなれば、ノラくんは助けたあたいを見てくれる。

しかし。

ストーップ！
へ。
へ。
嘘！　ぜーんぶ嘘だ！
うそ？
そう。全部真っ赤な嘘だよ。

ちょっとウガツ！
え、コイシ、なんで。
あっ、あの、これは。
こいつが今教えてくれたんだ。そこは地盤が緩くって、人が入ればたちまち崩れて大穴が空くってな。
えっ。
嘘だろ、そんなの、いつものでたらめに決まってる。
じゃそこの小石でも投げて試してみろよ。

ノラ、小石を拾って隙間に投げる。
カツーン、と音がしたかと思うと、
ガラガラガラッ！　と、地面が音を立てて陥没。

……。
……。
なあ？　優秀だろ。ぼくが選んだ奥さんは。ただの小石拾いにしとくにゃ勿体ないよな。
……。
なあ、ノラ。
えっ、ああ、……うん。
実はな、こいつ、お前のことが好きなんだってさ。
えっ。
ええっ！　ちょっと、ウガツ！
だから、お前を追ってここに来たんだと。そしたらお前がアブねえところ入ってくから、慌ててぼくに声かけたんだと。
あの、ウガツ。
だけど！　そう簡単にコイシは渡さないからな！　コイシ

ノラ　は、ぼくの奥さんだからな！
鉱員　……。
鉱員　（声）おーい、どうしたー。
コイシ　（声）なにかあったのかー。
ノラ　……あ、あの、ノラくん。
コイシ　……おれだって、おれだって！　渡した覚えなんかないからな！
ノラ　……。
ウガツ　ウガツ、絶対お前みたいになってやる。そんで、絶対お前から、コイシを取り返してやるからな！
コイシ　やれるもんならやってみな。
ウガツ　ねえウガツ、もういい、こんな茶番は終わりでいい。
コイシ　茶番ってなに。
ウガツ　え。
コイシ　ぼくは真面目だよ。いいか、ぼくがいいっていうまでは、コイシは、ぼくの奥さんだからな！
ウガツ　ウガツ！

ウガツ、いなくなる。

コイシ　そしてウガツはいなくなった。
ノラ　宵闇とともに山に入り。
コイシ　夜明けが来ても戻らなかった。
ノラ　ウガツは今でも戻らない。
コイシ　だからあたいはウガツを探してんのよ。この、こんがらがりまくった糸を解いてもらうためにね！
ゼンカ　あの。
コイシ　なによ。
ノラ　なんだよ。
ゼンカ　根本的なこと、言っていいですか。
コイシ　なによ。
ゼンカ　あなたたち、結婚出ませんよね。
ノラ　……。
コイシ　……。
ゼンカ　だって、女の子同士だから、結婚出ませんよね。
ノラ　……。
コイシ　……。
ゼンカ　わたし、街の食堂に勤めてて、だから、皆さんのお話は仕事中よく聞こえてくるから、知ってるんです。若くて腕のいいやつがいる、行方不明の爺さんとおんなじリズムで鐘をつくんだって。だけど何が惜しいって、あいつは女なんだよなって。力で男にゃかなわないからって。だから。

鉱員たち出てきて。

鉱員1　ええ？　だれを連れてくんだって？
鉱員2　ほれ、あいつのお気に入り。
鉱員3　小石拾いのコイシだろ。
鉱員4　なんだそれ。ちゃんと名前があるだろうに。
鉱員5　分かりやすくていいじゃねえか。
鉱員6　他でもねえあいつの頼みだしな。
鉱員1　友達想いのいい女だねえ。
鉱員2　それがよ、友達なんかじゃねえんだと。
鉱員3　それどころか嫌いなんだと。
鉱員4　じゃあなんで連れてくんだよ。

鉱員5　さあな。
鉱員6　天才の考えることは、俺たち凡人にゃわからんよ。

鉱員たち、消える。

コイシ　ノラくんはすごいの、あたいじゃ到底釣り合わない。
ノラ　おれは必ず一番になる。そのためなら何だってする。
コイシ　あたい、ウガツの奥さんだから。
ノラ　褒めてくれるのはコイシだけ。
コイシ　あたい、ウガツの奥さんだから…。
ノラ　コイシはウガツの奥さんになった。
コイシ　あたいからは、嘘にはしない。
ノラ　だからおれは手に入れたいんだ。
コイシ　ウガツにつき通してもらうんだ。
ノラ　嘘じゃないさ、だって、この気持ちはむかしから…。
コイシ　ウガツがいないとあたいたちは。
ノラ　ウガツが戻ればおれたちは。
コイシ　だからそこのあんた！　このコイシぶっかけられたくなかったら、早くウガツの居場所教えな！
ノラ　何か知ってても何も言うな！　じゃないとこいつでおめえの口を！
ゼンカ　ええっ。

と、ゼンカの耳に、知らない男の声が聞こえる。

謎の声　こっち、こーっち。
ゼンカ　へ。

謎の声　こっち、こーっち、ほれ早くせんと。
ゼンカ　は、はいっ。

ゼンカ、声のする穴の奥へ向かう。

コイシ　あ、まって、そっちは！
ノラ　コイシ！

ゼンカいなくなる。
コイシ追いかけようとするが、ノラが腕を掴んで止める。
穴の奥から、ふたたびゼンカの悲鳴と、地盤の崩れる音。
ノラとコイシ、残されて。

コイシ　放してよ。
ノラ　なあ、コイシ。やっぱり、おれじゃだめかな。
コイシ　ノラくん。
ノラ　なあ、おれ、頑張ってんだよ。おれ、ウガツなんかよりずっと稼ぐようになったし、今だってほら、コイシのそばにいられる。それに、おれ、おれには、コイシが。
コイシ　ダメに決まってんでしょ、だってあたい、ウガツの奥さんなんだから。
ノラ　……。
コイシ　……。

見つめあう二人。その表情は。

2

カラスと、地図を持った男が入ってくる。

地図男　見当たんないっすね。
カラス　あーくそ、あいつどこいった。面倒掛けさせやがって。
地図男　帰ります。
カラス　待て待て待て待て。
地図男　なんすか。
カラス　なんすか、じゃねえよ。な、もともと、おまえの責任でもあるんだからな。
地図男　だから、知らないって。
カラス　ああ？
地図男　…知らないっすよ。だって、別になくなってないし、取られてないし。
カラス　ほんとかね。お前そのへんガバガバだからな。一枚くらいなくなってもわかんねえんじゃねえの。
地図男　バカにすんなし。最近はちゃんと数えてるし。
カラス　じゃあいつの持ってた地図はなんなんだよ。…まあそれにお前、前科あるしな。
地図男　前科っていうなし。ていうかあんなの前科じゃないし。
カラス　ていうか、自分から渡したんじゃねえの。
地図男　は。
カラス　案外かわいかったしな、言い寄られてコロっと。（地図男の手元の地図覗いて）……いまどこ。
地図男　……。
カラス　聞いてんだろ。
地図男　……ここっす。
カラス　なるほどな、ここがこうなって。
地図男　たいして地図も読めないくせに。
カラス　あのなあクモ、そりゃお前みたいにゃいかねえよ、俺は地図のプロじゃねえんだから。けど俺にはな、土地勘ってのがあってな。
クモ　それみんな言うやつな。
カラス　…！
クモ　だいたいその女、ほんとに（地図を指して）ここから落ちたんすか。
カラス　そりゃ間違いないよ。ちゃんと覚えてるよ。
クモ　じゃあ出てくんのはここに間違いないっすから、それじゃ、あとは勝手にどうぞ。
カラス　待て待てって、お前の地図が間違ってたりはしねえの？
クモ　はあ？　ふへっ（笑って）、そんなのありえんし。
カラス　ああ？
クモ　分かりましたよ、探すんなら進みましょうよ。
カラス　おい。
クモ　どうせ動いたんでしょ、その女、道もわかんないくせに。
カラス　どっち行ったのか分かんのか。
クモ　分かるわけないっすよ。
カラス　は。
クモ　……チッ、また誰か報告もなく掘りやがって。地図作ってる身にもなれってんだクソが。

クモ、勝手に行ってしまう。

カラス　あ、おい、クモ、待てって！

カラス、クモを追いかける。入れ違いで、ゼンカ。

ゼンカ　あれ、あれ、あれ、いない。ていうか、（お尻押さえて）……痛い。もー、鉱山ってこんなに穴多いの？　ここどこ。（地図出して、見て）帰れるかな。

と、飯を食っている途中だったであろう女が一人、ひょっこり現れる。

飯女　あ。

ゼンカ　あ、ども。

飯女　え、あれ、うーわ、落ちてきた？

ゼンカ　あ、えと、はい。

飯女　まいったなあ。いい場所だったのに、また寝床変えなきゃ。

ゼンカ　寝床。

飯女　名前は？

ゼンカ　えっ。

飯女　名前。あんたどこの現場のやつ？　あっ！

飯女、ゼンカの顔をじっと見て。

飯女　うん、ヨシ、見たことない。うん、うん。

ゼンカ　あの。

と、ゼンカの腹がぐーっと鳴る。

ゼンカ　あ。

飯女　……食べる？

ゼンカ　いや、そんな、めっそうもない。

飯女　向こうにまだあるし。

ゼンカ　あ……。じゃあ……。

ゼンカ、器を受け取ろうとして、中を覗き込む。骨ばったものがスープの上に浮いている。

ゼンカ　えっ……、これ……。

飯女　美味しいよ、蝙蝠。見てくれは悪いけど。

ゼンカ　こっ……、（興味持って一口するが、激マズ）ごちそうさまです。

飯女　もういいの？

ゼンカ　あ、もう……はい。

飯女　ふーん。（スープをすくいながら）あの、ここに住んでるんですか。

ゼンカ　なに。悪い。

飯女　いや、別に。いつもそんなものを？

ゼンカ　……。

飯女　あ……。

ゼンカ、一度去ろとするが。

ゼンカ　……なにか作りましょうか。
飯女　は。
ゼンカ　あ、わたし、街で食堂手伝ってまして、ある程度のものなら作れるっていうか。
飯女　早く仕事戻ったら。仲間が待ってんでしょ。
ゼンカ　……いません。
飯女　は。
ゼンカ　仕事じゃないんで。一人で入って来たんで。
飯女　何の装備もなくここまで来たの？
ゼンカ　あ、あの、地図なら。
飯女　なめてんの？　死にたいの？
ゼンカ　……すいません。山のこと、ほとんど知らなくて。
飯女　鉱山の街に住むやつが、それじゃ勉強不足だろうよ。
ゼンカ　……。
飯女　……じゃあ、なんで、ここに。
ゼンカ　わたし、ゼンカっていいます。
飯女　え、ゼンカって、あの？
ゼンカ　あの、わたし人を探してまして――。
飯女　ウガツか。
ゼンカ　へ。
飯女　あーくそっ！　まただよウガツウガツ！　またあいつの差し金だよ、くそっ！
ゼンカ　差し金？
飯女　あんた、あいつに何聞いてきたの。
ゼンカ　いや、あの。
飯女　どうせあたしに会いに来たんでしょ。
ゼンカ　へ？　いや、わたしはウガツを探してて。
飯女　探す？
ゼンカ　あの、いなくなっちゃったから。
飯女　あんたもあんな嘘信じてんの。
ゼンカ　嘘？
飯女　ウガツはいろんな現場でヘマをして、前科作って作って作りまくって、あ、今言った前科ってのは。
ゼンカ　わたしのことじゃなくて、鉱山の中での事故のこと。
飯女　山に入れないわりには、そういうことはちゃんと知ってんだね。
ゼンカ　……。
飯女　……で！　挙句の果てにとんずらしたって話。あんなの嘘に決まってんでしょ。
ゼンカ　え、な、なんで。
飯女　だってあいつは今でも、あたしに嫌がらせ続けてんだから。
ゼンカ　え。

と、そこへ登場するのは「西の親分」と顔に書いたやつと、「西の子分」と顔に書いたやつ。

西の親分　やっと見つけたぞコウモリ！
西の子分　見つけたぞコウモリ！
ゼンカ　ど、どちらさまがた？
コウモリ　うーわっ、西の親分、まだなんか用かよ。
西の親分　なんか用かよたぁご挨拶だなコウモリよ、こないだてめえに教えてもらったアタリの情報、またおんなじように東のあいつらにも教えたそうじゃねえか。どういうこったよ、おおん！

西の子分　どういうこったよ、おおおん！
コウモリ　どうもこうもなにも、別にあたしはあんたらだけの情報屋じゃないし。
西の親分　んなこと聞いてねんだよ！　あたしゃあいつらだけには絶対負けたくねんだって。てめえが、あのウガツの恩人だっつうから、こっちゃあ驚くような大枚はたいてやってんじゃねえか。
西の子分　やってるんじゃねえかっつってな、な！
ゼンカ　え、恩人ってなに？
コウモリ　だからそんなこと言ってないし！　何回言ったらわかるの！

と現れる「東の親分」と顔に書かれたやつ。

東の親分　そうだぞ西の。
西の親分　お前は、東の！
ゼンカ　なんか増えた。
東の親分　そのお方はお前の懐では囲いきれない情報をお持ちなのだ。あのウガツが恩人とのたまうほどのお方だぞ。わたしと手を組むのが妥当な筋。
西の親分　うるせえ！　お前ら、こないだも、いい鉱石根こそぎ掘って帰りやがって。
東の親分　それはお前の腕がわたしに劣るからだ。わたしのせいではあるまい。
東の子分　（出てきて）そしていかにラックを味方につけているかどうか、ですね親分。
東の親分　さもありなん。
西の親分　あいつ腹立つー！
西の子分　腹立つぅ！
ゼンカ　全体的にうざい。
ウガツ　信じてくれよ、これだけはほんと、ほんとなんだって。ていうかさ、もう付きまとうのやめてくんない？
コウモリ　と、ウガツがいつの間にか入り込んでいる。
ゼンカ　えっ。
ウガツ　今までのが全部嘘でも、これだけは命かけてほんとだって言うよ。
コウモリ　あたしはウガツの恩人でもなんでもないの。もう巻き込まれんのはごめんだって。
ゼンカ　ウガツ。ねえ、あれ、ウガツ。

ゼンカ、ウガツがいることをコウモリに言おうとするが、コウモリ、時間が止まったように動かない。

ゼンカ　え？
ウガツ　（西の親分に）こいつは恩人なんだ、嘘だらけのぼくを救ってくれた。こいつのいう通りに掘れば、事故だって起こらんし、鉱石だってザックザク掘れる。信じてくれよ、こいつがいたらもしかしたら、山に伝わる伝説の宝を見つけられるかもしれない。なあ、これはぼくが言うたった一つの真実なんだ。
西の親分　おいウガツ、そんなの誰が信じるってんだ。
ゼンカ　なんで？

ウガツ　（東の親分に）悪いことは言わねえから絶対信じるな。これだけは嘘だ、誰かの流した大嘘なんだよ。こいつがぼくの恩人なわけないだろ、ぼくだってメーワクしてるんだ。こいつのいう場所にいい鉱石なんて眠っちゃいない。こいつにお宝なんか見つけられやしない。いいか、絶対信じるなよ、これは、ぼくが言うたった一つの真実だからな。

東の親分　うるさいハエだな、いいから仕事に戻れ。

ウガツ、いなくなる。

ゼンカ　今の、なんなの？

親分たち　なーるほど。

ゼンカ　え。

西の親分　あのウガツだって人の子だ、こいつは本当にちがいねえ。

東の親分　わたしを騙そうなんて１００万年早い、あれはきっと大嘘、あいつは見立ての天才に違いない。

西の親分　おいコウモリ。

東の親分　おいコウモリ。

西の親分　（ずた袋を差し出して）こないだ掘り当てた鉱石を売って出来た金だ、こいつを全額くれてやるから、そこにいるやつに勝てるアタリを教えな。

コウモリ　え。

東の親分　ではこちらは、そのはした金の3倍の額を支払おう。さあコウモリよ、わたしと一緒にこの山で一番のあたりを見つけに行こうではないか。

コウモリ　いや、あの、あたしは。

西の親分　断るのか？

コウモリ　え。

西の子分　断ったらどうなるか、おまえさんだってわからないわけあるまい。

西の親分　大枚はたいてやったんだ、おまえはこっちの味方のはずだよなぁ。

東の親分　何を言う、いい思いをさせてやったのはこちらも同じこと。

東の子分　こちらの味方のはずと聞かれて、首を縦に振る以外の選択肢はありますか？

コウモリ、腰に下げていた地図をそっと手に取って見る。

コウモリ　……！

西の親分　さあコウモリ、

東の親分　さあコウモリ、

西の親子　さあ、

東の親子　さあ、

東西親子　さあっ！

と、声。

クモ　あのー、困るんすけど。

皆　え。

クモ　勝手にバカスカ掘られても困るんすけど。ていうか、地図引くこっちの身にもなれっつうの、な。

西の子分　あいつは。

東の子分　地図引きのクモ。

クモ　（ゼンカに）いた。あんた。

ゼンカ　はい？
クモ　カラスが探してるの、あんただろ。面倒だから歩きまわるなよな。こっち。
ゼンカ　え、あ、あの。
クモ　どいつもこいつも無能なくせに、あっちこっち穴だらけにするなよな、あんたらが掘った穴、誰が地図引くと思ってんすか、てな。

東西の親分子分、顔を見合わせ、あっはっは、と笑って。

西の親分　安心しなよクモ、お前が心配するこったねえよ。
東の親分　そうだぞクモ、新しい地図はほかの誰かがちゃあんと書いてるんだから。
東の子分　そうですね。わたしたちのことはどうかお気になさらず。
西の子分　そういうことは、ちゃんと使える地図かけてから心配するこったな。

東西の親分子分、あっはっは、と笑って。

クモ　ばかにすんなし！　お前らが持ってるクソみてえな地図より、こっちの方が断然天才的だっつの。見てから言えよな。
西の親分　おお、じゃあ見せてみろよクモ。
クモ　は。
東の親分　この目で確かめてやるから、ほらこっちきて、わたしたちに見せてごらん。
クモ　お前らみたいなアホには絶対的に解読不可能だし。

クモ　嘘うなし！
ウガツ　笑うなしっ！　いいかこの地図はな、まだ誰も見たことのないくらいのとんでもない地図なんだからな！
ゼンカ　また、まただ、ウガツ。
西の親分　おいウガツ、無茶言うな。
西の親分　これが笑わずにおれるか。
東の親分　こんなところに道があるかよ。
東の子分　これもそうだ。
東の子分　こっちもだ。
西の子分　誰が使うか、こんなでたらめな地図。
西の親分　なんだって？　これが未来地図？
東の親分　未来の鉱山の姿を予言してる？
東の子分　わたしたちには土地勘ってのがあってな。
東の親分　この地図信じて、事故でも起きたらどうしてくれる。
西の親分　次起こしたらお前は前科3犯か。
東の親分　へっ、前二つなんか数に入らんさ。
西の親分　落盤程度の前科なら、穴掘り屋にとっちゃもはや勇気の勲章。
東の親分　だけどなあ。(ウガツを見て)あいつみたいになるのはなあ。
ウガツ　他当たってくれ。わたしたちは忙しいんだ。
チャンスだってのに。おまえらが要らないってんなら、他を当たるよ。

ゼンカ、その様子を見ながら混乱した様子。

ゼンカ　これは、なに、どうなってんの？　なんでウガツが。

と、ゼンカの耳にまた、声が聞こえる。

謎の声　おじょーさん。
ゼンカ　え。
謎の声　落ち着きなされおじょーさん。
ゼンカ　この声さっきの。
謎の声　今はふしぎに思うかもしれない。でも大丈夫、今はただじっと見ていればいい。
ゼンカ　どこにいるの？
謎の声　まだ見えないかもしれない、ずっと見えないかもしれない。
ゼンカ　なにこれ。わたし、おかしくなっちゃった？　だってこれ、人の記憶を覗いてるみたいに、目の前に、ウガツが。
謎の声　山ん中の空気は籠って沈んで、吸い込むと冷たくて少ぉし甘くて、苦い。削れた鉱石が粉塵となって空気と混じりあい、地上世界のそれとは少うしだけ、だけど確かに、違う大気となって漂い続け、皆がそれを吸い込み吐き出し繰り返される。
ゼンカ　目の前の景色は、おじょーさんが見たいと思っているのか。
謎の声　はたまた、あいつが見せたいと思っているのか。
ゼンカ　え。
謎の声　とにかく、時が来ればわかることもあるだろうて。
ゼンカ　……あなただれですか。
謎の声　おじょーさん。今はただ見ていればいい。そして、どうしておじょーさんがここへまた足を踏み入れようと思ったのか、その理由だけ、しっかり覚えておきなさい。
ゼンカ　……！

クモ　クモが出てくる。ウガツに食って掛かる。
ウガツ　おいウガツ！
クモ　なんだクモ、お前もそんな顔する時あるんだな。いっつも地図見てニヤニヤしてるだけなくせに。
ウガツ　ウガツ、あの地図どこやったし！
クモ　地図？
ウガツ　お前だろーがよ！　俺の地図かっぱらったの。
クモ　あー…？
ウガツ　とぼっけんなよカスが！　あの地図はな、俺のコレクションの中でも一番大事なもんなんだよ、ほら返せやれ返せ今すぐ返せ、そんで中絶対みんなよ絶対みんなよああっ！
クモ　あー…、悪い、もうない。
ウガツ　ファッ！？
クモ　あげちまった。だからもうないんだ、ごめんな。
ウガツ　んだとてめえ、おい待てゴルァ！
クモ　なあクモ、いい加減、書いた地図みんなに見せれば。
ウガツ　はあ！　そんなの、俺の勝手だし！　俺は俺が使うためだけに地図書いてんだし！　人のためなんか書くわけないし！
クモ　もったいねえ。すげえ地図なのに。他の誰にも書けない地図。
ウガツ　お前の頭の中が全部詰まった、空想と妄想と現実が混じった呪いみたいな希望の地図。
クモ　ふざけんなシ！　戯言ほざく前に地図返せよクソが！
ウガツ　なあクモ、よーく聞けよ。なくしたあの地図が、きっとおまえをいい方向に導いてくれる。必ずな。

クモは消え、代わりにコウモリ。

ウガツ　ウガツ、持っていた地図をコウモリに差し出す。
コウモリ　これやるよ。
ウガツ　なに、誰お前。急に話しかけないでくれる？
コウモリ　街でも見ない顔だね、よそから来た人？
　あの街の人間しか山に入っちゃいけないっていう決まりはないでしょ。
ウガツ　名前は。
コウモリ　ない。
ウガツ　ないわけないでしょ。ぼくはウガツ、名前は。
コウモリ　……コウモリ。
ウガツ　それが名前。
コウモリ　さあね、そんな風にも呼ばれてた。
ウガツ　なあコウモリ、何の装備もなくここまで来たの？
コウモリ　装備ってなに。
ウガツ　なめてんの？　死にたいの？
コウモリ　ほっとけよ、かかわったって面倒なだけだって。
ウガツ　鉱山なめんなよ、地図もなしにうろうろしてみろ、ちょっとの冒険と思ってたやつが、出口見失って行方不明になるなんてザラなんだからな。
コウモリ　別にそれでもかまわないし。
ウガツ　……。
コウモリ　いけよ。もう二度と、巻き込まれんのはごめんだから。もう二度と。
ウガツ　これやるよ。
コウモリ　要らないって。
ウガツ　いいから、ぼくはとっておきを持ってるから。
コウモリ　とっておきってなんだよ。
ウガツ　いいか、それ絶対大事にしろよ、きっとそれがあんたを救ってくれるんだ。必ずな。

　ウガツ、いなくなる。代わりに東と西の親分。
　東と西にウガツが何やら力説している。
　西と東、コウモリに金貨を渡して何かを聞いている。
　コウモリ、なぜ自分にそんなことを聞いてこられたのか理解ができない。
　しかし、とっさに手元の地図を凝視。
　地図にあった方向を適当に指さす。
　親分に指示され子分、そこを掘ると鉱石ざっくざく。
　親分、驚愕。以降、東西で同じやりとりが幾度もある。
　やがてコウモリ、地図上の指すべき方向を全て伝えてしまう。
　残る場所はひとつだけ。コウモリ、東西から詰め寄られる。
　金貨を差し出される。同時に、つるはしも突き付けられる。
　コウモリ、笑顔で西と東、両方の金貨を受け取る。
　そして、たったひとつしかないその方向を2組に教えるべく、
　ひきつった笑顔で、しかし、しっかりとした手つきで、
　その方向を指さそうと手を振り上げる。しかし。
　そこへクモが現れる。同時に。
　空間が元通りになった。
　でも一体、どこからねじれていたのだろうか。

クモ　（クモの手元の地図見つけて）ちょっおま！
コウモリ　え。
クモ　あっ、あ、すませーん。（コウモリの持っている地図をひっ

コウモリ　ぱる）
クモ　なに。（放さない）
コウモリ　あっ、すませんっ。（地図をひっぱる）
クモ　なに。（放さない）
コウモリ　や、はなせって。
クモ　なんで。
コウモリ　これ、これ、俺んだし！　勝手に見んなし！　まじで返せし！
クモ　これ、あんたが書いたの？　これ、本当にあんたが書いたの？！
コウモリ　う、嘘じゃねえし！
クモ　……。
コウモリ　なに、じっと見てんの、きめえし。まじで。
クモ　責任とれよな。
コウモリ　は？
クモ　責任とれよ、こんな地図よこしやがって。これさえなけりゃあたしはこんな目に合わなかった。ウガツがこんなもの持ってこなけりゃ、あんたが、こんなもの書かなけりゃ。
コウモリ　ファッ、知らんしなにそれ、言いがかりオツ。
クモ　これ返す。
コウモリ　え。
クモ　だからその地図見せろ。
コウモリ　な、なんで。
クモ　早く。
コウモリ　やだ。
クモ　やだじゃないよ、見せろ。
コウモリ　やだ！
クモ　見せろ！
コウモリ　やだ！
クモ　なんでやなのよ、なに、見られるの恥ずかしいの？
コウモリ　はずかしくねえし！　この地図はな、言っとくけど他の誰にも引けない特別なもんだから。天才的な俺様だからこそ引くことのできる特別な地図なんだからな！
クモ　うん、知ってるし。なんだ、ちゃんとわかってんじゃん。
コウモリ　は。
クモ　そうだよ。あんたの地図はすごい。それ見たあたしが保証したげる、あんたの地図はむちゃくちゃに見えるけど違う、無茶苦茶に見えるのは、今の道も、昔あった道も、そして今から引くべき道まで緻密に計算して書かれてるから。他の地図引きにゃそんな地図書く才能ないんだろうし、あんたが評価されてないんなら、それは穴掘り屋にその地図見るセンスがないんだろうよ。あたし山のこと全然知らないけど、穴だらけで掘りつくされたこの鉱山には、きっと、あんたのその地図が必要なんだと思うよ。

コウモリのその言葉に、東西の親分子分がざわめきだす。

コウモリ　……ちょ、ちょっと言ってる意味がイミフつーか。
クモ　だからほら見せて。
コウモリ　勘弁して。
クモ　見せて。
コウモリ　勘弁して。
クモ　見せろって！
コウモリ　まじて勘弁してって！

コウモリ　なんで??　見せない理由がわかんない。だってさ。
クモ　誰が褒めてもらいたいっつったよ。あんたが頭いいのは認めるよ、けどさ、あんたいいように使われてんのわからんかね。ほらな頭いいやつほどこれだよ。
コウモリ　……誰のせいでこうなったと。
クモ　ウガツのヴォケが。あいつが地図もっていかなきゃこんなことにならずに済んだのに。
コウモリ　なにウガツのせいにしてんの。
クモ　お前もウガツのせいにしてたし。
クモ　……。
コウモリ　……。
コウモリ　そうだよ。ウガツのせいでこうなったんだよ！　あたしはあのままでよかったのに！
西の親分　取り込み中に失礼するがね！
東の親分　忘れてもらっちゃ困るんだがね！
コウモリ　あーーーーっもう！　うるさいなあ！　掘りたきゃどこでも掘れよ！
親分たち　ああっ？！
西の子分　ダメなんだって！　このへんはずいぶん穴だらけだ。
東の子分　親分たちももうどこ掘っていいか自信ないんです、だから！
コウモリ　だったら、あいつに聞けよ！

指さしたのは、ゼンカ。

ゼンカ　へ。
コウモリ　あいつも地図持ってるんだとさ、だからあいつに聞けよもう！　こいつが地図見せない限り、あたしも何も言わない！
クモ　そんなの無駄だし、いくら待っても絶対見せるわけないし！
子分たち　……（狼狽するが、結果、ゼンカのもとへ行って）お願いします！
ゼンカ　え？　え、そんな、わたし。

と、ゼンカのまわりだけ時が歪む。
唐突にウガツが現れる。
その姿は、「ゼンカが知っている」、ウガツだ。
他の人々の時は止まっている。

ウガツ　なあゼンカ、悪い、金貸してくんない？
ゼンカ　え。
ウガツ　ちょっとでいいからさ、頼むよ。代わりに、どこでも行きたいところ連れてってやるからさ。
ゼンカ　わたし。
ウガツ　頼むよゼンカ。それとも、行きたいとこなんか、別にない？
ゼンカ　ある。
ウガツ　じゃあ決まりだ、ほら行こう、ゼンカ。
ゼンカ　待って…、待って、ウガツ！

ゼンカ、ウガツのいる方へ手を伸ばす。
しかしウガツは消えてしまう。
虚空へ伸ばされた手、相図となり、時が戻る。子分たち。

子分たち　親分！　あそこです！
ゼンカ　え。
親分たち　がってん承知！

コウモリ・クモ　え。

親分たち、満を持してつるはし片手に穴を掘りに向かう。

コウモリ　おい。
ゼンカ　なに。
クモ　なんであっちっつった。
ゼンカ　え。
コウモリ　あいつら死ぬぞ。
クモ　あっちはだめだ。逃げるぞ。
西の子分　え。
東の子分　え。
コウモリ・クモ　あ。
西の子分　お、お前の指示で落盤するなら。
東の子分　全部お前のせいだからな。あたしたちは関係ないから！
ゼンカ　そんな、わたし。

東西子分、すたこらさっさと走り去る。
クモとコウモリも走り去る。
突然のサイレン音！　そして、赤色灯がぐるんと光る。
東西の親分も仰天して、走り去る。
親分、持っていたつるはしをゼンカに無理やり押し付け去る。
蜘蛛の子を散らしたように人がいなくなり、
残るは、ゼンカのみ。

3

警官のような人間がずかずか入ってくる。

おまわり　はーい、みなさんそこまでー。つるはしおいてー。ここは掘削禁止エリアですよー。つるはしスコップ地面に置いて、手を頭の後ろに組んでくださーい。

オマワリ　掘削免許拝見しまーす、はーい、持ってない方は免許不携帯となって前科となりますよー。免許拝見しまーす。はい早く出してー。

ゼンカ　あ。……ども。

おまわりたち　あれ。

オマワリ　ねえシロちゃん。

シロ　なにクロちゃん。

クロ　ほらあいつ。

シロ　ほんとだ。また？

ゼンカ　え。

クロ　めんどくせ、もう今日は逮捕しとく？

シロ　いや、でも、なにもしてない……し。

クロ　どうだか、かわいい顔して実は。

シロ　またそうやって決めつける。よくないよ。

クロ　よくなくないよ、疑ってかかるのがうちらの仕事っしょ。

シロ　そういう考え方が冤罪を生むんだー。

クロ　そういう考え方が犯罪者を取り逃がすんだ。

シロ　犯罪者ってまだ決まってないでしょ。

クロ　けど現にまたこうやって不法侵入してるじゃない。

ゼンカ　あ、あの。

シロ・クロ　（ゼンカに）あのー（さ）。

ゼンカ　はい。

シロ　その服なに？

ゼンカ　あの、これは。

クロ　そのつるはしは。

ゼンカ　あの、これは。

シロ　危ないっていったよね。

ゼンカ　え。

クロ　こないだのこと、覚えてないの？

ゼンカ　こないだ。

シロ　もーほら、責めちゃ可哀想でしょ。どんな理由があるかしらないけど、送ってあげるから。

ゼンカ　あんな目にあっても凝りずにこんなとこまで来るなんて、肝が据わってるっていうかなんというか。けど、その好奇心が身を滅ぼすこともある、気を付けろよ。

シロ・クロ　あの。

ゼンカ　なに？　もしかしてケガでもしてるの？

シロ　教えてください。

ゼンカ　なにを

シロ・クロ　わたし……、あの時どこにいましたか。

ゼンカ　は？

クロ　どこにいましたか。どこで、わたしを見つけましたか。

ゼンカ　おまえ何言ってんの。

シロ・クロ　連れて行ってくれませんか。わたしを見つけたとこまで。……。

ゼンカ　ウガツを探してくれませんか。
シロ・クロ　！
ゼンカ　お願いします！

シロクロたちの目の色が変わる。
と、そこへカラスが入ってくる。

カラス　いた！　もーお前、動くなって言ったろ！　なにそのつるはし。

カラス、シロクロがいることに気づいて。

カラス　うわっ、あの、こいつ……、仲間です、仲間！
シロ・クロ　え。
ゼンカ　え。
カラス　なんつーか、はぐれちゃって、ははは、新人なもんで、仕方ねえなー、ほら、行くぞ、こい！
ゼンカ　えええっ？！

ゼンカ、カラスに連れられて穴の奥へ。
呆然と見送るシロクロだったが。

クロ　おい。
シロ　うん。

二人の去った方向を追いかけていく。
誰もいなくなった所に、一人の女が、ゆるりと入ってくる。

女　お邪魔しますよ、っと。

女はまわりを探るように見ていたが、
やがて、誰も戻ってこないことを確信したのか、
スコップを片手にカツカツとあたりを見渡し始める。
その手つきは「掘る」といよりは、「探す」といったよう。
スコップを土に突き立てず、ザラザラと上面のみならして、
何かが「残って」いないか、探しているようだ。
いくつか石は拾い、じろじろ見てみるが、
目新しいものは見つからなかったようだ。

女　ちぇっ、しけてやがる。

女、いくらかにはなるであろう石をポケットにしまう。
と、穴の奥から人の声。

ゼンカ　あの、すいません。あの、
女　お、やべ。

驚いて女、身をひそめる。
やってきたのは、ゼンカとカラス。

ゼンカ　放して下さい！　あの！
カラス　うるせえよ！　これ以上面倒掛けさせんな。帰るぞ。
ゼンカ　帰りません。
カラス　お前なあ！　ほんといい神経してるわ。

ゼンカ　放して下さい。
カラス　ありがたく思えよ！　知り合いでも何でもないのにこんなとこまで追いかけてきてやったんだ。いいか、なめてかかると死ぬぞほんとに。ここはそういう場所なんだよ。落盤起きたりな、ガスが出てたりな、空気だって薄いしな。

ゼンカ　そんなの知ってるし。
カラス　っ！
ゼンカ　！

カラス、ゼンカに向かって手をふり上げる。
しかし、寸でのところで思いとどまる。

ゼンカ　……？
カラス　……行くぞ。
ゼンカ　……！
カラス　貸した金はもう諦めろ。金より大事なもんがあるだろ。
ゼンカ　でも。
カラス　俺らだって探してないわけじゃない。あいつがいなくなって、どのくらい経ったと思ってる。
ゼンカ　どのくらい――
カラス　一ヶ月だ。な、山の事何も知らん奴が出しゃばって、そいつにまで行方不明になられちゃこっちが迷惑なんだよ。
ゼンカ　でも。
カラス　それともなんだ、お前は、あいつが今どこにいるのか知ってるってのか。
ゼンカ　そ、れは。
カラス　……二度とやっかいな真似はしてくれるなよ。

女　ゼンカ、気圧されたまま、引っ張られて行ってしまう。
様子を見ていた女、出てきて。
なになに今の。取り込み中？　こんな場所でぇ？　やるねェ。
と、奥からゼンカの声、次いで、何かがゴッと体にあたる音。
カラスの「イタッ！」という声。
ゼンカが一人で戻ってくる。女を見つけて駆け寄る。
ゼンカ　かくまってください！
女　はあ？？　……えー、（戸惑うが、ゼンカに手招き）ほい！
女、ゼンカ、隠れる。
カラス　追ってカラス、ゼンカの持っていたつるはし持って。
……絶対ぶん殴ってやる。くそっ！
カラス、いなくなる。
女　ひょっこり出てくる女とゼンカ。
ゼンカ　やるねー、あんたカラスの女？
女　いや、全然……。……え。
ゼンカ、女の顔をまじまじと見つめる。表情が変わっていく。
女　あいつ、カッコつけて一匹狼決め込んでるんだと思ってたら、

いつのまにこんな。……あんた華奢だね、ちゃんとごはん食べてる？
ゼンカ　……タガシ？
女　は？
ゼンカ　タガシ、タガシだ！
タガシ　え、なに。
ゼンカ　あの、（自分を指して）お隣の、ゼンカ。
タガシ　え、ゼンカ、……って、ゼンカ？！
ゼンカ　そう！　思い出した？
タガシ　うわ、懐かしー！（顔をまじまじと見て）ホントだゼンカだ。元気だった？
ゼンカ　死んだと思ってた。
タガシ　え？
ゼンカ　ずっと帰ってこなかったから。
タガシ　あー、そうね、うん、生きてた生きてた。悪いね、心配かけちゃって。
ゼンカ　ううん、良かった。
タガシ　うん。えってか、あんた、なんでこんなとこに？
ゼンカ　お向かいに住んでたケブは死んだよ。落盤事故で。
タガシ　え。
ゼンカ　ミネラは元気。こないだ、すごいあたりを見つけたんだって。
タガシ　へぇ。
ゼンカ　ジェムは相変わらず。グチグチ言いながら仕事してる。
タガシ　そうなんだ。で、ゼンカは。
ゼンカ　母さんのお店手伝ってる。
タガシ　良かったじゃない、ちゃんと仕事もらえてさ。
ゼンカ　うん……。
タガシ　で、なに。なんでこんなとこにいるのよ。
ゼンカ　……それは。
タガシ　おばちゃんこのこと知ってんの？
ゼンカ　……。
タガシ　え……なに、無断で？
ゼンカ　……。
タガシ　あんたがこんなことするとはね。
ゼンカ　あのね、わたしも、みんなと一緒に山で（仕事したかったの）。
タガシ　無理でしょ。山の連中はゲンを担ぎたがるもんなのよ。あんたの名前じゃ仲間作るのがまず無理だ。ゼンカなんて名前、穴掘り屋にとっちゃ不吉でしかないからね。
ゼンカ　……。
タガシ　送ってやるから、街に帰ろ。
ゼンカ　いい。
タガシ　道分かるの？
ゼンカ　……。
タガシ　泣くなって、ほら、送ってやるから。
ゼンカ　わたしみんなと仕事がしたかったの。
タガシ　そうかそうか。
ゼンカ　みんなにおいてかれるのが寂しくて。
タガシ　そうだな。
ゼンカ　なんで仲間にしてくれなかったの？　あの時あんなにお願いしたのに。
タガシ　あ……あー。
ゼンカ　……。
タガシ　それはだな、ゼンカのことを思ってな。
ゼンカ　……。

タガシ　……ゼンカ。
ゼンカ　タガシ、会えてうれしかった。けどわたし、用事があるから。
タガシ　用事？
ゼンカ　うん。人を探してるの。嘘吐きウガツを。
タガシ　ウガツ？　あんたウガツと知り合いなの？
ゼンカ　え、タガシも？
タガシ　そっか……、それは無駄足だったな。
ゼンカ　なんで。
タガシ　ウガツは死んだよ。落盤の下敷きになって。
ゼンカ　嘘。
タガシ　だったら良かったんだけどな。この目でちゃんと見た。みんなからは、行方不明なんて言われてるみたいだけどな。
ゼンカ　嘘だ、ウガツが……？
タガシ　あいつはわたしの子分だったんだ。わたしの仕事を手伝ってもらってた。そう。あの事故が起こる、その時までは。

風が起こる。ウガツ、現れる。

タガシ　おうウガツ！
ウガツ　タガシの親分！　仕事です！
タガシ　次はどこのどいつだ。
ウガツ　へいっ。南へ３つ隣の穴ぐらを掘削中の奴らなんすけどね、ここの親分が、子分どもを馬車馬のようにこき使いに使った挙句、相場の３分の１もない程の取り分しか与えてないっていう噂なんすよ。
タガシ　へー。そいつぁ穏やかじゃないねえ。
ウガツ　なんでも、よその組を追い出された、いわくつきの人材ばっか寄せ集めてるみたいなんすけど、まあ、そんなはみ出し者ですから、金がもらえなくても強く言えねえみたいなんでさあ。
タガシ　よーっしゃ分かった。次の獲物はその大将に決まりだ。懐にがっちりしまい込んだきたねえお宝は、可愛い子分どもにちゃあんと分けてやんねえとなあ！
ウガツ　へい親分！

タガシ、モノローグ。

そう。わたしはただの穴掘り屋じゃアない。平たく言うと盗人、ドロボウだ。昔はいっぱしの穴掘り屋だったんだが、ひょんなことから、こんなことを生業にする世界に足を突っ込んじまったってェわけだ。ただし、わたしにも曲げられない信念ってのがある。口に出すのはどうも照れくさいんだが、強きを挫き弱きを助ける。神聖な鉱山にだって悪どく儲けるものもいりゃ、騙されて貧乏するものもいる。わたしはそんな格差をなくすために、こうやって、汚れ仕事を引き受けているってわけなのさ。

と、そこへ現れるクロネズミ、シロモグラ。

シロ　そこまでにしてちょうだい。
クロ　ここで会ったが１００年目ってやつだ！
ゼンカ　あいつら、さっきの！
タガシ　なんだゼンカ、あいつら知ってんの？　あいつらはこの山で起こった悪事を裁くおまわり二人組、シロモグラとクロネズ

クロネズミ　ミだ。何かにつけてわたしたちの邪魔をしてきやがるんだよな。
シロモグラ　邪魔してるのはお前らの方だろうがよタガシ！
タガシ　毎回毎回、逃げ回ってくれちゃって。
クロネズミ　チューチューうるさいんだよネズミとモグラ！
シロモグラ　んだとテメ！　喧嘩売ってんのか！
ゼンカ　クロちゃんダメだって！
タガシ　ねえ、逃げた方がいいんじゃないの？
　いーや大丈夫だ。あいつらにはいっこ、どうしようもない弱点があってな。
クロネズミ　今日こそ逮捕だ、行くぞシロちゃん！
シロモグラ　待ってよクロちゃん。
クロネズミ　ああ？　なんだよ。
シロモグラ　泥棒に入られた組の子分がね、今回の件、事件にするつもりはないって。
クロネズミ　またかよ！
シロモグラ　逆に犯人に感謝してるんだって。金に執着しすぎて傲慢だった親分も、守るものがなくなって、きっと変わっていくだろうって。
クロネズミ　いい人かよ！　現に金はなくなってるわけだろ！
シロモグラ　もちろん、最終的に判断するのはわたしたちだけど。……どうする？
クロネズミ　……。
シロモグラ　クロちゃん。
クロネズミ　わかったよ！　けど、次は絶対に豚箱行きだからな、首を洗って待ってろよ！！
タガシ　クロネズミ、シロモグラ、去る。
　あいつら、自分らで何か決めるっていうのが極端に苦手なわけよ。だからな、この山のおまわりがあいつらになってから、穴掘り屋の前科がほぼ増えなくなったってわけだ。ま、わたしにとっちゃ仕事しやすくなっていいんだけど。さあてウガツ、今日は誰を狙う？
ウガツ　調べてますとも。親分、あっちです！
タガシ　よーし、（きた）——
　と唐突に。
　「ウガツ」という文字を顔に張り付けた人が次々入ってくる。
ウガツ２　親分、今日はあっちです！
タガシ　は？
ウガツ３　あっちはどうですか親分！
ウガツ４　親分、今日はあっちですどうぞ！
タガシ　ああ？
ウガツたち　親分！
タガシ　ウガツがいっぱい。
ウガツたち　何言ってんすか親分！　ぼかあひとりっすよ！
　ウガツたち、なんとかして自分たちを一人に見せようと努力。遊んでいるようにも見える。
タガシ　何やってんだ。わかったよ、じゃあ、今日はあっちもこっちもそっちもどっちも、全部まとめてお宝回収といくか！

ウガツたち　へい親分！

タガシ　タガシ、モノローグ。

わたしたちは街の英雄となった。シロモグラとクロネズミは躍起になってわたしたちを捕まえようとしたけど、街の大半はわたしたちの味方だったし、イライラしてんのは、卑怯な手口で金を手にした奴らだけだった。

クロネズミとシロモグラを囲む黒メガネの人々。

黒メガネ1　どーなってんたよ！

黒メガネ2　なんであいつら逮捕しないのよ！

クロネズミ　なんだよお前ら。

シロモグラ　誰なんですがあなたたち。

黒メガネ3　善良な一市民のご意見番だよ！　しかと聞けよなオラァ！

黒メガネ1　貧乏人はなんて言ってるか知らんが、金取られてるやつがいるのは事実だろうよ！

黒メガネ3　実際被害こうむってんだよ！

シロモグラ　え、こうむってるんですか？　あなたが？

黒メガネ3　わたしじゃねえよ、だれかがな！

黒メガネ2　おまわりってのはあれかい、被害者を差別してもいいってのかい。

黒メガネ1　金持ちは金取られて当然だなんて思っちゃないだろうね！

クロネズミ　じゃ聞くが、その金持ちたちのしてきたことは真っ当なのかよ。

黒メガネ2　ああ、まっとうだね！

黒メガネ3　半端者どもに仕事やってるんだ、感謝しなくちゃいけないよなあ。

シロモグラ　わたしたちだってあいつらを野放しにするつもりはありませんから。今日のところはこれで。

クロネズミ　言われなくても、今度は必ず逮捕してやるさ！

黒メガネ1　……行こうぜ。

黒メガネ2　ああ。

黒メガネ3　こいつらにゃ、ハナっから無理だったんだよな。

黒メガネ1　親父さんが草葉の陰で泣いてるわ。

黒メガネ2　不慮の事故だったとはいえなあ。

黒メガネ3　親父さんがいたから安心して働けたのに。

黒メガネ1　あいつらが後継ぐって言いだしたんだろ、責任は果たしてもらわんとな。

クロネズミ　……。

シロモグラ　……クロちゃん。

シロクロ、黙ってしまう。

タガシ　わたしたちは順風満帆だった。盗人に順風満帆なんて言葉似合わないけど、とにかく、わたしたちの働きのおかげで、街にある不公平は少しずつ――。

タガシが言い終わらないうちに、ウガツたちがなだれ込んでくる。

ウガツ2　親分取ってきました！　北の大富豪のお宝でさあ！

ウガツ3　貧民街に配り歩いてきましたでさあ！

タガシ　お、おう！　よくやったぞ！
ウガツ　ミナミの成金野郎の黄金つるはしでさあ！
ウガツ４　砕いて貧乏人に分け与えましたでさあ！
タガシ　おー！
ウガツ３　街はずれの豪邸にお宝ざっくざくでさあ！
ウガツ　全部まとめて分配したでさあ！
タガシ　やるぅ！
ウガツ４　慈善団体の純金マリア像でさあ！
ウガツ２　ぶっ壊して配り歩いたでさあ！
タガシ　え？
ウガツ３　貧乏人がお宝隠し持ってたんでさあ！
ウガツ４　残らず全部奪い取ってやったでさあ！
タガシ　おい待て、ちょっと待て。
ウガツたち　なんすか親分！
タガシ　いやいやいやいや。違うでしょ。
ウガツたち　はい？
タガシ　だから。
ウガツたち　へい親分！
ウガツ３　われらはプライド高き義賊でさあ！
ウガツ２　強きを挫き弱きを助けるんでさあ。
ウガツ４　西の大金持ちが隠し持ってたお宝でさあ！
ウガツ　全部みんなに分配したでさあ！
ウガツ２　てのは嘘で、結局自分で使っちまったんでさあ！
タガシ　おい。
ウガツ　鉱山の中に極悪人の隠し金庫があったんでさあ！
ウガツ４　でも盗んだのがばれちまって倍にして返せって脅迫されたんでさあ。
ウガツ２　仕方ないから貧乏人にやった金を奪い返してやったんでさあ！
タガシ　いやいやいやいや、何やってんの。
ウガツたち　え。
タガシ　それじゃただの盗人になっちゃうでしょ。
ウガツたち　え。
ウガツ３　おれら、盗人じゃなかったんすか。
タガシ　いやいやいや、それは、そうだけど。や、だからな。

ウガツ４　ウガツ達、笑って。
ウガツ３　やだな親分。
タガシ　なんかさっきからおかしいと思ってたんすよ。
ウガツ２　なにが。
ウガツたち　親分も、やってるじゃないすか。
タガシ　火事場泥棒。
ウガツ３　え。なあに言ってんだよ、そんなのやってないよ。
ウガツ４　え。いやいやいやいや。
ウガツ２　やってるじゃないすか。
ウガツ３　親分、ご冗談。
タガシ　火事場泥棒やらせたら、
ウガツ４　親分の右に出るものはいないんでさあ。
ウガツ２　何ならこの義賊のふりだって。
ウガツ３　そいつを隠すためのもの。
タガシ　何言ってんだ。
ウガツ４　ほんとのことを言ってるだけっす。
タガシ　黙れよ、これはわたしの回想シーンだろうがよ。

ウガツたち　はい？
タガシ　主導権はこっちにあんだよ、無駄口叩くならつぶすぞ。

ウガツたち、笑って。

ウガツ２　つぶすも何も。
ウガツ３　全部ほんとのことですから。
ゼンカ　タガシ？
タガシ　ああそうか、嘘はお前の十八番だもんな。勝手に言ってろ。
ウガツたち　だってぼくらが最初に会ったのも、鉱山の――

タガシ、無理やり、モノローグ。

タガシ　わたしはこっそりアジトを抜け出した。ウガツはわたしに内緒で罪を犯してた。信頼してた仲間だったのにどうして。わたしはその足で、あの、おまわりたちのもとへやってきた。

クロネズミとシロモグラがいる。

クロネズミ　なんだよ、おまえから訪ねてくるなんて。逮捕されに来たのか。
タガシ　ウガツを捕まえてくれ。
クロネズミ　は。なんだそれ。
タガシ　わたしに黙って悪さをしてる。止めてやりたいんだ。
シロモグラ　仲間を売りに来たの？
タガシ　違う。まさかこんなことになるなんて思ってなかったんだ。仲間だからこそ、ちゃんと罪を償ってほしいと思うんだ。
クロネズミ　お前に罪はないっていうのか。
タガシ　……、いや、この期に及んでそれは虫が良すぎるよな。あいつをこの道に誘ったのはわたしだよ。一緒に逮捕されるなら、仕方がないって思うさ。

クロネズミ　……。
シロモグラ　……。
クロネズミ　分かったよ。あいつの身辺調べておくから。
タガシ　待て。
クロネズミ　なに。
タガシ　いつ逮捕してくれる。
クロネズミ　いつって、調べがついたら……。
タガシ　だから、いつ。
シロモグラ　……。
タガシ　あんたらにとっても、いい話だと思うけどな。
クロネズミ　は。
シロモグラ　ここでぼちぼち、ちゃんとしたおまわりになりなよ。
タガシ　……。
クロネズミ　……。
シロモグラ　大丈夫、最初の一回がバカみたいに怖いって思うのは誰でもそうさ。しかもそれが、人の人生左右するようなことだったらなおのこった。けどさ、その一回の壁さえ超えられれば、あとは逮捕したくてしたくてたまんなくなるって。
クロネズミ　あんたと一緒にしないで。
シロモグラ　…まあ、今のままでいいなら。
クロネズミ　やるさ。
シロモグラ　クロちゃん。
クロネズミ　ウガツを捕まえりゃいいんだろ。

シロモグラ　待って、またそうやって安請け合いして。
クロネズミ　なんだよ、やるって。
シロモグラ　でもクロちゃん。
クロネズミ　あのさ！　……いいかげんやめてくれる。
シロモグラ　なにを。
クロネズミ　そうやって人の顔色ばっかり見て、守ってやってるみたいなツラされんの、過保護かよ、メーワクなんだよ。
シロモグラ　……クロちゃん。
クロネズミ　もう二度と口出しするなよ。
シロモグラ　あたしは。
クロネズミ　（タガシに）協力してやるよ、けどその後は、おまえも一緒に逮捕してやるから覚悟しておけよ。
タガシ　気を付けろよ、あいつは自分の罪をなすりつけるために、全部わたしがやったと嘘をつくかもしれない。けど。
クロネズミ　わかってるさ、そんなちんけな嘘で、だまされるわけないだろ。

ウガツがやってくる。一人だ。

ウガツ　親分！　今日はどこへ行くんでさあ！
タガシ　なあウガツ。
ウガツ　なんすか親分！
タガシ　今日はちょっとゲームをしないか。
ウガツ　ゲーム？

タガシ、ウガツに耳打ち。

ウガツ　へ？
タガシ　やってみたくないか？
ウガツ　面白そうだけど、うまく出来るかな。
タガシ　出来るさ。思ったままをやればいい。
ウガツ　分かった。じゃあ、今日はぼくが――

クロネズミとシロモグラがやってくる。

クロネズミ　そこの二人、動かないで。
シロモグラ　つるはしスコップ地面に置いて、手を頭の後ろに組んでください。
ウガツ　なんだ？
クロネズミ　ウガツ、ネタは上がってんだ。お前を逮捕する。
ウガツ　え。
タガシ　（わざとらしく）なんだお前ら、突然やってきてなんだよ。
クロネズミ　残念だが、あんたのお仲間は罪を犯してる。窃盗にスリにひったくり、そして事故が起きて人の近寄らなくなった現場に忍び込んでの、火事場泥棒。これ以上野放しにしておくわけにはいかないんだ。おとなしくお縄にかかれ、ウガツ。

ウガツ　……。
シロモグラ　そのまま手を頭の後ろに組んで、うつぶせに。

ウガツ、少し間を置いたのちに、わっと泣き出して。

ウガツ　わーーん！　悪かったよぉぉ！　許してくれよぉ！　悪いとわかってたけど、どうしてもやめらなかったんだよおぉ。
シロモグラ　な、なに急に。

ウガツ　何度もやめようと思ったんだよぉ、けど、一度甘い汁吸っちまったらもう、その味が忘れられなくてよお…！

クロネズミ　……。

ウガツ　せめてもと思って、取ったもんをみんなに配ってたら、それがありがてぇなんて言われるようになって、嬉しくってまたほいほいと…！

タガシはウガツを見つめている。

ウガツ？　昔っからリーダーになりたくて、街にいる頃は近所の仲間集めて、輪の中心にいるのはいつもわたしだった。けど、仕事だとなかなかそうもいかないんだよな。最初に入ったチームに全然なじめなくて、その後もチームを転々としたけどだめで。イライラして、腹が立って、腹いせに、昔いたチームの成果を根こそぎ盗んだ。ばれて追放されるかと思ったけど、疑いひとつかけられることはなかった。あいつらのあわてふためく顔が滑稽すぎて、そこから、盗みがわたしの生きがいになったんだよな。

ウガツ　ちゃんとお巡りさんに捕まえてもらって、前科つけてもらわねえと、もう自分だけでは止まれねえんでさぁ！　お願いします！　アッシを裁いておくんなせぇ！

タガシ　そいつも罪を認めてる。さあ、一思いに。

クロネズミ　……っ。よし、じゃあ、ウガツ、おまえには……。

タガシ　……。

クロネズミ　おまえには……。

ウガツ　……。

クロネズミ　おまえには……っ。

シロモグラ　前科いくつ付ける？

クロネズミ　え。

シロモグラ　自分で吐いたんだ。疑う余地もないでしょ。

クロネズミ　シロちゃん？

シロモグラ　何びびってんの。逮捕してほしーって言ってんのよ、ほら逮捕だタイホ！

クロネズミ　待って。

シロモグラ　こいつの人生がどうなろうが知ったこっちゃないでしょ。

クロネズミ　（ウガツに）いろいろやってんだってなあ、一度に１０個ぐらい前科付けとく？

シロモグラ　シロちゃんどうしたんだよ、変だよ、それに、……自白したなら更生の余地だって。

クロネズミ　何ぬるいこと言ってんだよ！　出かける前の威勢はどうしたよ！　だから舐められんだよ！　あたしだってメーワクしてんだよ！

シロモグラ　だって、だって、…シロちゃん変だよ、こいつにも人生があるんだし。決めつけはよくないし。

クロネズミ　それいつものあたしのセリフな！　そういうのメーワクだったんだろ！

シロモグラ　……っ。

クロネズミ　もういいよ、クロちゃんが決めないなら、あたしがひとりで。

シロモグラ　待って！　……報復されるのが怖いの。ごめんシロちゃん、やっぱりわたし、この仕事はもう…！

シロモグラ、クロネズミを抱きしめる。

シロモグラ　クロちゃん、それでいいの！
クロネズミ　え。
シロモグラ　もー、待ってたよあたし。クロちゃんはそれでいいの！　親がどうでも、クロちゃんはクロちゃんでしょ！　それでいいの。無理しなくていいの。
クロネズミ　……シロちゃん。

シロモグラ、クロネズミ、見合って。

シロモグラ　ほら、あたしたちはカガミでしょ、ちゃあんとあたしはクロちゃんの欲しい言葉をあげるから。二人っきりの家族じゃない、ちゃんと守ってあげるから、だからメーワクだなんて思わないで。ね、クロちゃん。
クロネズミ　……あの。
シロモグラ　なに、クロちゃん。
クロネズミ　や、違うんだ。
シロモグラ　え。
クロネズミ　シロちゃんが、どう言うか、知りたかった。
シロモグラ　え。
クロネズミ　こっち側になって、なんていうか、知りたかった。
シロモグラ　なにを。こっち側？
クロネズミ　でも無理だねきっと、シロちゃんはわたしとおんなじ場所には立ってない。ずっとわたしの背中から見てきたもの。ほんとの先頭がどんなものか、わたしに全部押し付けてたシロちゃんにはわからない。例えばわたしがいなくなって、シロちゃんが一人で立たざるを得なくなった時。やっと、わたしが感じた恐怖感を味わってもらえるんだ。ねえ、シロちゃん。

シロモグラ　……。
ウガツ　あのっ！
シロ・クロ　なに。
ウガツ　お願いします！　ぼくの罪を裁いて下さい！

シロモグラ、クロネズミ、ウガツを見る。そして。

シロモグラ　火事場泥棒、前科１犯。
クロネズミ　窃盗、前科２犯、
シロモグラ　ひったくり、前科３犯。
クロネズミ　結婚詐欺、前科４犯、
シロモグラ　傷害、前科５犯、
クロネズミ　裏切り、前科６犯、
シロモグラ　吹聴、前科７犯、
クロネズミ　無銭飲食、前科８犯、
シロモグラ　横領、前科９犯、
クロネズミ　不法侵入、前科１０犯、
シロモグラ　恐喝、前科１１犯。
クロネズミ　誘拐、前科１２犯。
シロモグラ　嘘吐き、前科１３犯。
シロ・クロ　嘘吐きウガツ、おまえの前科は１３犯だ。

いつの間にか、ウガツたちが集まっている。

ウガツ　あれ、待って、あの、いっこ忘れてますけど。
シロ・クロ　え。
ウガツたち　落盤による業務上過失致死。前科。

ウガツ　……あれ、前科何犯でしたっけ。
シロ・クロ　え。
ウガツ２　ていうか、横領ってなに？　そんなのやったっけ。
ウガツ３　誘拐って？　いったい誰を？
ウガツ４　恐喝なんてできるわけないって。
ウガツ２　出来るわけないなら、そんな前科、つくわけないよなあ。
ウガツ３　じゃあ……？
シロ・クロ　……。

ウガツたち、シロ・クロを見つめる。
と、地面の奥から地鳴りのような音がする。

ウガツ　え。
タガシ　まずいな、どっかで落盤だ。
ウガツ　逃げなきゃ！　でもどっちに？？
タガシ　割と深いところだからな、出入り口ふさがれちゃ厄介だ。こっから一番近い空気穴は、地上に行ける道はえっと。

ウガツたち、わあわあと走り回っている。

タガシ　ウガツ、あんまり走り回るな、さっきの揺れに誘発されて、いつ落盤が起こっても、
ウガツ　え。

ウガツと目が合う。直後、タガシ、モノローグ。

タガシ　わたしは自分の言葉を呪った。その言葉を放った直後、ウガツのいた通路を丁度ふさぐように、天井が崩れ、気が付くと、大きな岩々が重なる、新たな壁が出来上がっていた。直前に振り返ったウガツと、わたしは目が合ったような気がした。けど、今はもうその姿はなかった。そこにいた人の力では、到底助け出すことはできなかった。

ゼンカ、戻ってくる。
いや、彼女はいなくなっていたわけではない。
彼女はウガツの姿に扮し、タガシの回想に現れていた。
思い返せば、これまでの場面のどのウガツも、
違った姿、違った声をしていた。
タガシ、シロモグラ、クロネズミ、立ち去ろうとしたその時。
声が、がれきの方から聞こえる。こだましている。

ウガツ２　（声）おーい。
ウガツ３　（声）おーい。
ウガツ４　（声）おーい。
ウガツ２　（声）たすけてくれー。
ウガツ３　（声）たすけてくれー。
ウガツ４　（声）たすけてくれー。
ウガツ２　（声）ここにいるぞー。
ウガツ３　（声）へんじしてよー。
ウガツ４　（声）いきてるぞー。

３人　……。

しかし、シロモグラ、クロネズミ、そしてタガシ。

ウガツを助けることはしない。
シロモグラ、クロネズミ、立ち去ろうとする。

ゼンカ　あの。
クロネズミ　ここだよ。
ゼンカ　え。
シロモグラ　この間あなたを見つけた場所。
ゼンカ　え。
クロネズミ　次は自力で帰って来い。こないだみたいに、自分で立てないくらいふらふらでも、二度と助けてやらないから。

二人、去る。
タガシも立ち去ろうとする。
ゼンカが呼び止める。

ゼンカ　タガシ。
タガシ　またな。気が向いたら食堂に食べ行くよ。おばちゃんによろしく。
ゼンカ　……。
タガシ　…じゃあな。

タガシ、行ってしまう。取り残される、ゼンカ。

4

ゼンカ、一人になり、立ち尽くす。あたりを見回す。
ふっ、と手元のランプが消える。

ゼンカ　あっ。

真っ暗になる。

ゼンカ　え、あ、そんな、うそでしょ。

ゼンカ、慌ててランプに火をつけようとするが。
近くで声がする。

謎の声　まったく、こんなとこまで来てしもうたかの。
ゼンカ　え…！
謎の声　帰れなくなっても知らんぞ。
ゼンカ　この声。
謎の声　おじょーおーさん。

暗闇に目が慣れてくる。
すると、ゼンカの近くに大きな男が立っている。

ゼンカ　うわあああぁ、おっちゃん、だれ。
おっちゃん　おおお、見えとるんか。

ゼンカ　だれ。
おっちゃん　嘘じゃなかろうな。
ゼンカ　うわっ、な、なに！
おっちゃん　おおっ、ほんとに見えとる！
ゼンカ　なになに？？
おっちゃん　ほれ、あーくしゅ。
ゼンカ　へ？
おっちゃん　ほい。

ゼンカ、おっちゃんと握手しようとする。その手がすり抜ける。

おっちゃん　ああ、やっぱりこれはむりかー。
ゼンカ　なに、あなた、だれ？
おっちゃん　ああ、すまんすまん、生きた人間と話できたんが久々すぎて嬉しくってのー。
ゼンカ　生きた。
おっちゃん　声は届きやすいんだがの、たいがいは姿が見えんのよ。やー今日はいい日だ。
ゼンカ　死んでるの？
おっちゃん　怖いか？
ゼンカ　……怖くない。
おっちゃん　な、案外見えちまえばそんなもんなんよ。もとは生きた人間だったわけだしな。
ゼンカ　おっちゃんは、ここで、なにしてるの。
おっちゃん　おー、そりゃあ難しい質問だなあ。まあ端的に答えると、なにも。
ゼンカ　え。

おっちゃん　なにもしとらん。ただ、おるだけだ。
ゼンカ　……寂しくないの。
おっちゃん　もともと山が好きだったからの。たまにこうやって、迷ってる人間助けたり、脅かしたりして、暇つぶしとる。
ゼンカ　脅かすって。
おっちゃん　で、おまえさん、探し物は見つかったんか。
ゼンカ　……まだ。
おっちゃん　なるほどな。もう少し話聞かんとダメか。
ゼンカ　……ほんとに見つかるのかな。
おっちゃん　どーした。なに弱気になっとる。
ゼンカ　おっちゃんは、ウガツを知ってるの。
おっちゃん　ああもちろん、おっちゃんの話、聞かせてやろうか。
ゼンカ　ウガツはどこにいるの。
おっちゃん　あ？
ゼンカ　教えて、どこにいるの？！
おっちゃん　待て待て、そう急かしなさんな。大丈夫、おじょうさんは必ず、あいつを探し当てることができるさ。
ゼンカ　……。
おっちゃん　それより、なんか変だと思わんか。
ゼンカ　なにが。
おっちゃん　ウガツだよ、今まで出てきたウガツ見て、なーんか変だと思わんかって聞いとるんだよ。
ゼンカ　……変……うん。変。
おっちゃん　だよなあ。変だよなあ。
ゼンカ　うん、なんか、いろんな顔のウガツがいて、どのウガツもぜんぜん違ってて、どれがほんとのウガツなんだろうって。
おっちゃん　何を言うとる。
ゼンカ　え。あ、違った？
おっちゃん　まあええわ。あんただったら、ほんとのウガツを思い出せるか。
ゼンカ　え。
おっちゃん　思い出してやれるか。
ゼンカ　あの。
おっちゃん　それとも、わしが先に思い出してやろうか。
ゼンカ　あの。
おっちゃん　どっちでもええぞ、さあ、どうする？　まあ、わしら以外にも、もう一人、ウガツを思い出してやれるやつがおるがの。

カラスがやってくる。

カラス　カラスさん。
おっちゃん　ゼンカ、もういい加減にしてくれ。帰るぞ。
カラス　カラス。
ゼンカ　……え。
親方　カラス。
カラス　……親方？
親方　だめだ、こいつには見えんらしい。残念だがのう。
カラス　なんだ今の。
親方　こいつのから先に見るか。
ゼンカ　え。
親方　どれでもええぞ、おまえさんが好きに選べ。
カラス　……はい。
ゼンカ　お前、どこ見てんだ？　誰としゃべって。
カラス　カラスさん。聞かせてください。ウガツとの話。

カラス　……勘弁してくれ。
ゼンカ　相棒、だったんでしょ。
カラス　誰からそんなこと聞いた。
ゼンカ　ウガツから。
カラス　……。
ゼンカ　聞かせて下さい、ウガツとの話。
カラス　そんなに聞きたいのか。
ゼンカ　はい。
カラス　……楽しい話じゃないぞ。それでもいいんだな。

ゼンカ、頷く。親方、二人を見つめている。
親方、カラス、そしてゼンカのいる場所の中心に。
ゼンカが知っているウガツが現れる。
その顔は、へらへらと笑っている。

ウガツ　カラスー。

カラス、ウガツを殴り飛ばす。

カラス　もうついてくんな！
ウガツ　待ってよー、カラスー。
カラス　いいか、迷惑なんだよ、おまえみたいなやつに付いてこられちゃ、こっちの格が下がるんだよ。
ウガツ　へへっ。
カラス　何嗤ってんだ。
ウガツ　山に行くのか、ついていく。
カラス　ついてくんな。

ウガツ　場面変わって。
カラス　カラスー、待ってよー、歩くの早いよー。
ウガツ　足手まといはついてくんな。
カラス　へへ。今日の狙いはどこなの？
ウガツ　教えるわけないだろ。
カラス　こないだのコウモリいっぱいに襲われた場所かな、それとも、蜘蛛の巣だらけのあの道の。
ウガツ　まだ奥だ。
カラス　えー、うそだろー。
ウガツ　いやだったら街へ帰れ。
カラス　あ、まってよー。

鉱員1　鉱員たち。
鉱員2　どうしちゃったんだろね。
鉱員3　なにが。
鉱員4　カラスだよ。またウガツと遊んでら。
鉱員5　つきまとわれてんだろ。可哀想に。
鉱員6　しかしウガツもよくやるよね。
鉱員7　ちがいねえ、あんなヘンクツに付きまとうなんてな。
鉱員1　仕事はできるかもしれねえが。
鉱員2　あーだめだめ、おれはあいつとは馬が合わねえから。
鉱員3　わたしも。仕事は無理だな。
鉱員4　あいつと合う奴なんているのかね。
　　いないよ、親方ぐらいだったんじゃない。

鉱員5　そーだな。
鉱員6　あいつも、ウガツがいて助かってるんじゃねえの。
鉱員7　なにそれ。
鉱員6　だから、あんなやつでも、一緒にいるやつがいるだけマシってこと。
鉱員5　あ。

カラス、いつから聞いていたのか。

カラス　……。
ウガツ　カラス、早いよー。
鉱員3　行こうぜ。

鉱員、そそくさといなくなる。

ウガツ　カラス？

カラス、ウガツを殴る。そのまま、去る。
ウガツ、座り込んで殴られた箇所をさすっている。

ウガツ　いてー。

奥から、親方が現れる。

親方　痛いか。
ウガツ　うわっ、なに。
親方　おーおー、腫れとる腫れとる。ちゃんと冷やさんとあとに響くぞ。
ウガツ　だれ。
親方　おおお、見えとるんか。
ウガツ　だれ。
親方　嘘じゃなかろうな。
ウガツ　うわっ、な、なに！
親方　ほれ、あーくしゅ。
ウガツ　へ？
親方　ほい。

ウガツ、親方と握手しようとする。その手がすり抜ける。

親方　ああ、これはむりかー。
ウガツ　ゆーれい？
親方　ま、そんなとこだ。すまんな。
ウガツ　なにが。
親方　痛いだろう、あのあほう、昔っから短気でいかんのだ。
ウガツ　もしかして、親方ってひと？
親方　どうしてわかる。
ウガツ　カラスからよく聞くよ。よくぶん殴られてたって。
親方　あいつ……。お前は、ウガツってやつだな。
ウガツ　そう。よく知ってんね。
親方　幽霊はな、たいがいのことなら知ってるんだよ。壁になって聞いとるからな。

入れ替わって、カラスとウガツ。

ウガツ　なー、また山行くの？
カラス　またお前か。
ウガツ　親方探しに？
カラス　悪いか。
ウガツ　ううん。わるくないよ。
カラス　今日はちょっと奥へ行く。ほんとに危ないかもしれない……から、足手まといになるから絶対ついてくんな。
ウガツ　あのさカラス。
カラス　なんだよ。
ウガツ　……ううん、なんでもない。
カラス　何もないなら話しかけてくんな。
ウガツ　待ってよ、一緒にいくからー。

入れかわって、親方とウガツ。

親方　そういわんと、一生のお願い。な、死んどるけど。
ウガツ　やだよ。
親方　簡単な事だろうに。あの子に、わしが生きとるって伝えてくれりゃいいんだから。
ウガツ　（小声で）やだよ。
親方　あーそうかそうか引き受けてくれるか。
ウガツ　（大声で）やだって！　聞こえないふりしないでくれる？
親方　なんでだの！　簡単な事だろうに！
ウガツ　鐘つきってあれだろ、ノラっていう女の子だろ。
親方　そーそー、目の中に入れても痛くないってのはあの子のことだな。
ウガツ　なんでそんな嘘を。
親方　……あの子ががんばっちまうからな。わしは生きていて、別の山で元気に仕事してることにしといてくれたら、あの子だって、あの家をしょって立とうなんて思わんだろ。
ウガツ　でも嘘じゃないか。
親方　知らんのか、嘘にはな、いい嘘っていうのがあるんよ。付いた方がいい嘘、つかれた方が嬉しい嘘もあるんよ。
ウガツ　でも嘘じゃないか。
親方　なんだ、嘘吐きウガツは嘘吐きだからそう呼ばれとるんじゃないのか。
ウガツ　……しらない。
親方　あーそうかそうか引き受けてくれるか。
ウガツ　やだって！
親方　やーよかったよかったこれで一安心！
ウガツ　やだからね！
親方　最近耳が遠くての、山で仕事ばっかりやってたからかのう、死んどるけど。

入れ替わって、ここは、街の食堂。

ゼンカ　ゼンカが、仕事をしている。
ゼンカ　はい。かしこまりました。少々お待ちくださいませ。

ゼンカの横を、ノラとコイシが通りかかる。

ノラ　早くしろよコイシ、メシ全部なくなっちまうぞ。
コイシ　大丈夫だよノラくん、ああ見えてみんな優しいもの、ちゃんと残してくれてるって。

ノラ　コイシ　コイシ便所長いんだよ。あー腹減ったー。
ちょっと、もー、待ってよノラくん。

それを見ているゼンカ。その目はどこか、うらやましそう。
二人、いなくなる。小さなため息をひとつ。
と、そこへ。

ウガツ　なあなあ、そこのおねーさん。
ゼンカ　え。
ウガツ　そこのおねーさん。
ゼンカ　なに。
ウガツ　悪いんだけど、金貸してくんない？
ゼンカ　え。
ウガツ　頼むよ。金ないの忘れて注文しちゃってさ。なあ。
ゼンカ　……。
ウガツ　聞いてる？
ゼンカ　仲間に借りればいいでしょ、わたしじゃなくて。
ウガツ　無理無理、みんな貸してくんないよ。
ゼンカ　なんで。
ウガツ　なんでって、信用ないからなあ、へへ。あ。
ゼンカ　……代わりになんでもいう事聞いてくれるならいいよ。
ウガツ　えー、いう事？
ゼンカ　それとも、この場で食い逃げって叫ばれたい？
ウガツ　あー待って待って、カラスにまた殴られる。
ゼンカ　どうすんのよ。
ウガツ　分かったよ。貸してくれたらなんでもいう事聞いてやるよ。
ゼンカ　約束だからね。あんた、名前は。
ウガツ　ウガツ。あんたは。
ゼンカ　……ゼンカ。
ウガツ　ゼンカね、なにすりゃいいか決まったらまた教えて。恩に着る、ありがと！

入れ替わって、ウガツとカラス。

カラス　なーカラス、もうやめようよ。
ウガツ　なんでお前に指図されなきゃいけない。
カラス　仕事しよーよ、ツケだってたまってきたしさあ。みんな心配してるよ。
ウガツ　あいつら、諦めんのが早すぎるんだよ。親方にしてもらった恩を忘れたんか。
カラス　なあ、カラス。
ウガツ　なんだよ、無駄口聞いてる暇はねえって。
カラス　ぼく、親方に会ったよ。
ウガツ　……は。
カラス　親方としゃべった。カラスのいう通りだったよ、でっかくて優しそうな人だったよ。
ウガツ　どこで。
カラス　山の中。

カラス、ウガツを殴る。

ウガツ　って。
カラス　早く案内しろ。
ウガツ　幽霊だった。

カラス　は。
ウガツ　親方、幽霊だったよ。自分は生きてることにしてほしーなんてお願いされちゃって、そんなの、無理に決まってるって――。

カラス、ウガツを殴る。

ウガツ　ってー。
カラス　舐められたもんだな。
ウガツ　え。
カラス　そんな嘘で俺が引き下がると思ったのか。
ウガツ　嘘じゃないよ、（殴られる）
カラス　やっぱり噂通りだったな。
ウガツ　なにが。
カラス　嘘吐きウガツ、どんな時でも、どんな奴にも、平気で嘘をつく。
ウガツ　カラスには一度もついてないよ、だってカラスは相棒だから。
カラス　相棒になった覚えはない。
ウガツ　へへっ、そうだっけ。
カラス　消えろ。
ウガツ　あっ、なあ、ぼく、今度女の子を山に案内しなきゃいけなくってさ、なあ、ついてきてくんないかな、カラスが一緒にいてくれたら絶対安心だから、一人じゃ心細くって。
カラス　断る。他を探せよ。
ウガツ　カラス。
カラス　それから、もう二度と、俺の前に顔見せるな。……次顔見せたら、殴るどころじゃ済まないからな。

ウガツ　……分かったよ。今までごめんな、カラス。

一部始終を、親方は見ていた。
ウガツが去り、反対方向にカラスが去っていく。
転換して、ゼンカとウガツが鉱山内を歩いている。

ゼンカ　なーゼンカ、どこまで行くの？
ウガツ　もっと奥。
ゼンカ　疲れたよ、休もうよー。
ウガツ　さっき休んだ。
ゼンカ　帰ろうよー。
ウガツ　帰りたかったら、今ここで貸した金返して。
ゼンカ　……。
ウガツ　ほら、今度はどっち。
ゼンカ　えーっと、（地図見て）あっち。

ゼンカ、ウガツの差した方向に歩く。

ゼンカ　ねー、あんまり奥まで行くとやばいんだって。
ウガツ　ねえウガツ。
ゼンカ　なにー。
ウガツ　あんたってほんとに、あのウガツなの。
ゼンカ　あのって、どの？
ウガツ　だから…。
ゼンカ　よくわかんないけど、街にウガツって名前のやつはぼくしかいないから、たぶんぼくのことだと思うけど。
ウガツ　……。

ウガツ　あ、ほらあそこ、座れる。きゅうけーい。

ウガツ、高台に座りに行き、休憩している。
岩肌から水がしたたり、ぴたぴたと音がしている。

ウガツ　つかれたー。
ゼンカ　ねえ、これどのあたりまで来たの？
ウガツ　わかんない。
ゼンカ　え？
ウガツ　だって地図とかほとんど見たことないもん。カラスは感覚派だったし。
ゼンカ　ちゃんと帰れるよね？
ウガツ　分かんない。
ゼンカ　ウガツ！
ウガツ　だってゼンカがぐんぐん行っちゃうから。
ゼンカ　……。
ウガツ　結構奥まで来てるとは思うよ。このへんの石の色、あんまり見たことないし。
ゼンカ　……。
ウガツ　ねえゼンカ、なんで山なんかに来たかったの？
ゼンカ　べつにいいでしょ。
ウガツ　ぼくうらやましーけどなあ。山に入らなくていいなんて。
ゼンカ　あんたも街に一人で残ってみたらわかるよ。山に入れないのが、どれだけつらいことか。
ウガツ　ぼくは入れても落ちこぼれだからなー。なんにもできないのに山に入らなくちゃいけないのも、けっこうしんどいよ。
ゼンカ　……。
ウガツ　なあゼンカ。
ゼンカ　気安く呼ばないでくれる。
ウガツ　なんで。
ゼンカ　嫌いなの。その名前。
ウガツ　可愛いと思うけどなー。
ゼンカ　どこが。
ウガツ　全部のお花、ゼンカ、ほら、ゼンカ、ほら、花がいっぱい見えてくる。ゼン、カ。
ゼンカ　……お花みたいに可愛らしく育ちなさい。山のお花を全部集めても負けないくらい、にこにこ笑顔で育ちなさい。
ウガツ　？
ゼンカ　そんなの無理に決まってる。たった一人で街に残って、へらへら笑えるわけないじゃない。
ウガツ　大切にしなくちゃだめだよ。すごい名前じゃないか。
ゼンカ　意味わからない。すごいって何？　ただ不吉ってだけではじかれて、まわりに誰もいなくなるようなこの名前のどこがすごいって？？
ウガツ　だって山に入らなくてよくなる名前なんて、すごいに決まってるよー。付けた人は天才だね。
ゼンカ　は。
ウガツ　山ってのは危ないとこなんだ。みんなちゃんとそれ分かって入ってるし、ほんとはやだけど、あの街にいるやつはそうしなきゃいきてけないから、男も女も関係なく山に行く。けどさ、山に入らずに暮らせるんなら、どんなにいいかってみんな思ってるよ。
ゼンカ　じゃあ。だったらなんで。

ウガツ　ウガツ、そこいらをふらふらと歩いている。
　　ゼンカの声は届かない。
ゼンカ　だから大切にしなきゃだめだよ、もはや愛情の塊だよね、ゼンカ、ねえ誰がつけてくれたの？
ウガツ　……だったらなんで。
ゼンカ　ゼンカ。
ウガツ　なに。
ゼンカ　ここ、実はお気に入りの場所なんだよねー。こっちにおいでよ。
ウガツ　……。
ゼンカ　なあゼンカ、ゼンカはどうして、山に入りたいって思ったの？
ウガツ　……それは。
ゼンカ　夢だったから？
ウガツ　そう、夢、だったから。
ゼンカ　なんにもないでしょ、暗くて息苦しいしむっとしてるし、毎日仕事するのも気が滅入るんだよねー。
ウガツ　でも、入れないよりマシだよ。
ゼンカ　だからさ、最近、ぼくも夢持とうと思って、決めたの。
ウガツ　どんな。
ゼンカ　山の上で寝っ転がって空を見る。
ウガツ　え。
ゼンカ　ああ、もちろん街でも見れるけどさ、そうじゃなくて、山のてっぺんに出て、頭の上いっぱいの空を見ること。絶対気持ちいいと思うんだ。
ウガツ　……。
ゼンカ　もしそんな場所見つけたらさ、ゼンカにも教えるから、また一緒に来ようよ。鉱山なんていいとこじゃないけど、ゼンカが行きたいっていうなら、また案内してやるから。
ウガツ　ウガツ。
ゼンカ　ほら、こっちおいでよ、ここ、カラスにもまだ秘密にしてたんだぜ。
ウガツ　ウガツ。
ゼンカ　足もと気ぃつけてな、ここ、穴ぼこ多いし、水が溜まってて滑りやすいから。
ウガツ　ウガツ。
ゼンカ　ほら、こっち、ここからの眺めが、すげえきれいなんだ。ほらこっち。
ウガツ　ウガツ！
ゼンカ　へ？　……あ。
　　その瞬間、ウガツが消えていなくなる。
　　足を滑らせ、谷底深くに、落ちてしまった。
　　きっと、助からない。
　　ゼンカはそれを、見ていた。
ゼンカ　……「夢」じゃないよ、ウガツ、山に入りたかったの、夢じゃないよ、わたしが、山に入りたかった理由は。
　　カラスが現れる。ゼンカのもとへ。
カラス　あいつ、こんなとこ内緒にしてたのかよ。

ゼンカ　え。
カラス　ほら、見てみろよ。

ゼンカ、カラスに促され、天井を見る。

カラス　なかなかこんなとこ見つかんないんだぜ。でっかい空気穴だよ。……しかし、山の中から見るこいつは、なんでこう、毎回こんなにきれいにみえるんだろうな。

ゼンカ　空。
カラス　まっぶし。さ、帰るぞ。
ゼンカ　カラスさん。
カラス　なに。
ゼンカ　ちょっと、かります。
カラス　は。

ゼンカ、うつむいたまま、カラスの両腕をぐっとつかみ、
そのまま、カラスの肩に顔をうずめる。
そして、泣く。
カラスはそのまま、じっと立っている。

エピローグ

鉱員たちがたくさんいる鉱山入り口。
カラスがいる。イライラしている。

カラス　あいつ、なにやってんだ、8時には来いって言ったのに。くそっ。

別の空間に、ゼンカが出てくる。誰かと、しゃべっている。
冒頭と同じく、母であろう。
変わって、鉱員たちがたくさんいる鉱山入り口。
カラスのもとにゼンカが到着。

ゼンカ　カラスさん。
カラス　おせえよ！　何やってんだ！
ゼンカ　すいません！
カラス　いっとくが、足手まといにだけはなってくれるなよ。
ゼンカ　はい。
カラス　俺についてくるってことは、それ相応の実力を持ってるってことだからな。
ゼンカ　分かってます。
カラス　新人だからって手加減しないぞ。
ゼンカ　分かってます。
カラス　泣き言言ったら置いてくからな。
ゼンカ　分かりましたから、早く入りましょう、カラスさん。
カラス　あ、ああ、……そうだな。
カラス、持っていたスコップをゼンカに渡してやる。
ゼンカ、それを、受け取って。
ゼンカ　……！
カラス　ゼンカ。
ゼンカ　何ですか。
カラス　お前は、何で山に入るんだ。
ゼンカ　……。
カラス　……もしも、もしもだぞ、あいつへの償いとか思ってるなら。
ゼンカ　カラスさん。
カラス　なんだ。
ゼンカ　一緒に来てくれて、ありがとうございます。
カラス　あ？　ああ、…俺は別に。
ゼンカ　ほら、早く行きましょう。
カラス　おい、答えになってない。
ゼンカ　山にも知り合い増えましたし。また会えたらいいんだけど。
カラス　おい。
ゼンカ　幼馴染も山にいるんです。
カラス　おいゼンカ。
ゼンカ　何でかなんて、まだ分かりません。
カラス　は。
ゼンカ　まだ何も変わってないから。
カラス　……。
ゼンカ　でも、山に入りたかったのは嘘じゃないです。だから。

カラス　ほんとだろうなそれ、嘘じゃないだろうな。
ゼンカ　はい、ほんとです。
カラス　……わかったよ、信じてやるよ。
ゼンカ　行きましょうカラスさん、ほら、先越されまくってますよ。
カラス　うわっ！　昨日いい場所見つけてたのに、クソッ！
ゼンカ　……。
カラス　ゼンカ、早く来い！！
ゼンカ　はい。

カラス、先に山へ。
ゼンカ、立ち止まり、空を見上げる。
それはきっと、ほんの少しの間だ。
ゼンカ、自分で歩を進め、山に入る。
終幕。

〈上演記録〉

羊とドラコ　Stage-02
「嘘吐きウガツの冒険譚」
脚本・演出　竜崎だいち

●出演
ゼンカ／ランプ女　……　丹下真寿美
カラス／作業着の男　……　桐山篤
コウモリ／飯女　……　松村里美
ノラ／鐘つき　……　林田あゆみ（A級MissingLink）
コイシ／バケツ女　……　和田明日香
クロネズミ／オマワリ　……　山根千佳（TAKE IT EASY!）
シロネズミ／おまわり　……　江本真里子
クモ／地図男　……　坂本良徳
タガシ／女　……　是常祐美（シバイシマイ）
親方／謎の声／おっちゃん　……　殿村ゆたか
ウガツ　……　竜崎だいち・他
※俳優のクレジットは上演時に準じています。

●スタッフ
舞台監督／今井康平（CQ）
照明／海老澤美幸
音響／児島塁（Quantum Leap*）
舞台美術／高島奈々（七色夢想）
衣装／植田昇明（kasane）
演出助手／プリン松
宣伝美術／北村美沙子（Drive）
制作／浦田瑞希（観劇三昧）
ケータリング／白野景子
映像撮影／武信貴行（観劇三昧/SP水曜劇場）
舞台写真／河西沙織（劇団壱劇屋）

●開催日
二〇一七年五月十八日（木）～二十一日（日）　6ステージ

●会場
芸術創造館（大阪）
大阪府大阪市旭区中宮二丁目一一ノ一四

こちらの作品の著作権は放棄しておりません。
上演等のご希望や、各種お問合せは、左記メールに御連絡下さい。

羊とドラコ　竜崎だいち
ryuzakidaichi@gmail.com